俳　句　雑　誌

水　明

２０２０　７月号

令和二年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十三巻第七号

《今月のかな女》

蚊帳くゞるや笄ぬきて髪淋し

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

櫛・簪を外して笄を抜き取り、身を屈めて蚊帳にはいる。日常日本髪を結っていた時代の婦人の就寝時の姿を詠んだ俳句である。日本髪は勿論、蚊帳をはじめとして、蚊遣りや蚊取線香も実生活から遠ざかってしまった。季語として残されている佳き時代の風物を、かな女の俳句を通して再認できたことが嬉しい。

（鬼之介・註）

水　明

第1078号

―華の一句―

囀に吾が口笛のラプソディー

渋谷　きいち

ラプソディーを日本の言葉に直すと狂詩曲になり、それを掘り下げると、非常に難解な俳句になる。
口笛の曲は、藤山一郎の歌った懐かしの歌謡曲「東京ラプソディー」で、小鳥たちに負けじと顔を朱に染めて、佳き昭和の銀座・神田・浅草・新宿に思いを馳せている。

（鬼之介・推薦）

水明

令和２年
７月号

今月のかな女　山本鬼之介　4
華の一句　1
うすもの（作品）　大村　節代　6
受難曲（近詠）　菊池ひろこ　7
藤房（近詠）　町野　広子　8
雪景　※雪欄作家近詠鑑賞　井口　俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　大村　節代　菊池ひろこ　栢尾さく子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　丸山マスミ　藤澤　喜久　柚木　治子　ほか　19
季音「花」（同人作品）　野口　和子　矢島　清　梅澤　佐江　ほか　24
鼓笛集（同人作品）・私の一句　64
現代俳句鑑賞　網野　月を　30
俳誌望見　梅澤　佐江　29
句集喝采　近藤　徹平　68

☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句　日髙　徹　32
ＴＯＲＵの鈍　網野　月を　34
○自選二十句　染谷　正信　36
正信讃歌　高島　寛治　38
○自選二十句　梅澤　輝翠　40
潮騒に和す　石井　喜恵　42

水明集　新野田　暦文　西幅　公子　静香　ほか　44

水明集作品評　山本鬼之介　56
水　琴　窟（水明集五月号鑑賞）　池田　雅夫　60
水明の記事他誌転載　62
水明例会報・各地句会報　70・73
夏季競詠作品募集　72
水明夏行・りんどう忌のお知らせ　69
水明発展基金御礼・風声・後記　79・78・80

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

うすもの

山本 鬼之介

忍び言かはす若葉の垣根越し

悪縁を絶てぬふたりに皐月波

女店主はかつてマドンナ葛桜

どくだみの迫る銅像正三位

羅を粋に着こなしお部屋様

悪(わる)の華さく夏の芝居の「河内山」

蟣蠓や過去は謎めく尼法師

妙齢を過ぎて身につく藍浴衣

受難曲

大村節代

胸中にバッハのソナタ新樹光

新樹光心に響く受難曲

怒り肩と撫で肩添うて新樹かげ

新樹蔭おん身を憶ひ薄化粧

アーカイブの扉を開く新樹なか

大股の死者が出ていく新樹の夜

夜の新樹久にひもとく継(つぎ)色紙

その昔、「音楽の旅」の案内人の指揮者が、自分の葬送の曲を探す旅ですと言う。一緒にテレビを見ていた夫が「僕はバッハだ」と呟いた。

幾年も経て夫の突然の死に接し、ふとその事を思い出して、葬儀社に相談すると、生演奏の弦楽四重奏で如何ですかと言う。そこで子供達が曲を選び、夫は通夜も告別式もバッハに包まれて昇天した。

今まで夫の事は句にも文にも書いた事は無かった。しかし今回のコロナ騒動で、散歩をする位でどこにも行けないある日の事、歩き疲れて公園のベンチで一休みしていると、バッハが聞こえたような……。

藤房

菊池　ひろこ

藤房を斬れば翅音の藤色に

藤房の斬られあだ波たつ水面

列島初夏意味を付さるる地図の赤

蝌蚪らみな雄のつもりで動きをり

何某の旧式カメラ蝌蚪の池

青嵐高きところに他校の窓

郭公の杉深井戸に倒立す

実は最近まで知らなかったが「ウイルスは蛋白質と核酸から成る非生物的な側面と遺伝子を持つ生物的な側面を持つ」という。折から、新型コロナウイルス感染拡大に備えて、観光客制限のために藤房が多量に切り落とされる画像をテレビで見たが、それは「切る」というより「斬る」であるように感じた。

水明の句会も開催の制限があり、主宰にお目にかかってのご指導は頂けない。我々の上にも水遣りが欲しくなる毎日である。

雪景

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　　町野広子

◇雛まつり（四月号）　山中　順子

下戸なのについ淡麗甘口雛まつり
白酒を御気に召されて腫れ瞼

雛まつりの華やかさに気分も盛り上がり、下戸の作者も甘口の酒に手が伸びる。ほんの少しのつもりがついつい。思わず笑ってしまったユニークな一句。お供えの白酒をお気に召した雛人形「ありがとう、あとは皆で召し上がれ」と会話が聞こえて来そう。日本人の顔を模した雛人形の腫れ瞼が言い得て妙。白酒にほんのり紅い頬と瞼。佳き一日である。

流れ里の雛ゆるやかに着て雅
ひなたちよねむつておくれ夜を閉づ
雨の夜の和紙の湿りを雛納め

遊廓の雛即ち遊女達を示すのであろうか。ひらひら華やかに着飾り雅ではあるが、その奥に多くの涙があったはず。さあ夜が来た、雛達も眠っておくれと灯を消し一日を終える。目を閉じる事のない雛達は灯を消した部屋にじっと佇む人々が寝静まったあと、声なき声で話し、笑い、皆の幸福を祈りつ甘酒やあられ、菱餅で宴会をしているかも知れない。

雛人形は飾るのも仕舞うのも晴れた日を選ぶ。今夜は雨で雛を包む和紙も湿りを帯びる。朝までに雨は止むはず。明日晴れてから納める事としよう。女性は多忙である。

◇街道は今（四月号）　星野　和葉

俳聖の一歩一歩に芽吹きかな
今昔を暗渠に流し紅白梅

ある日「草加宿」を歩く機会に恵まれた作者。此処は「奥の細道」最初の宿。芭蕉と弟子の曽良の像を拝顔し偉大な先達の一歩一歩に思いを馳せる。柔らかな芽吹きに心が癒される。嘗ては街の中を流れていた川が覆いをされ今は道路として広く使用されている。川は地下を流れ暗渠となり、今昔の様々が次々と流される。現世を見れば梅が美しい。

旧道の町屋に「塩」と梅日和
空海とあらば参らむ梅の寺
木の芽張る学校の名が駅名に

草加宿を行くと古い町屋に「塩」の古い看板。今は何処でも手に入る塩も当時は貴重品で専門店で扱われていた。町の雰囲気と共に梅日和に作者のゆったりとした動きが見える。

梅を見事に咲かせる寺が空海に縁の処と知り早速参拝に向かう。俳句を嗜む者としてはこの寺も本日の旅の目的である。

学校の名が駅名になっている所は、筆者の近辺にもある。小田急沿線でも成城学園前、玉川学園前、東海大学前とありそれぞれの学校が広大な敷地を有し、多くの若者達で周辺は賑わう。木の芽張るの季語が青年達の象徴に相応しい。

◇春のうた（五月号）　吉住　光弥

薄氷に残心と云ふ底ぢから
山茱萸咲く空に一気の刷毛捌き

春先に薄々と張る氷。昼を待たずして融けてしまう。しかし、この薄氷にも融けまいとする力があるはず。これは作者ご自身の心意気のようにも思われる。来し方に思いを馳せ、病やウイルスには負けまいと力を漲らせる。春の先駆けの黄色い花は毎年春を迎えた喜びを感じさせてくれる。空の青、花の黄色そして雲の白が鮮やかに見えて来る。

いつしかに白鷺の艶野川肥ゆ
天空早や誘ひの彩燕来よ
富士山湧水ふりむき仰ぐ初桜

一羽で佇む白鷺のま白なその姿は清く美しい。春を待つ心は人も動物も同じで、野や川は肥沃な状態で来る物を受け入れる準備が出来ている。毎年燕の声を耳にすると、無事に来てくれた事の喜びで筆者も心が温かくなる。明るく柔らかい春の空はすっかり仕度も整い、長旅の燕達は全身で喜びを表すごと翻る「誘ひの彩」が瑞瑞しい。日本人の心の故郷の富士山は四季を通して美しい姿を見せてくれる。福井県に生まれ今関東圏に住む筆者にとっても、富士山は憧れの存在。麓に住む方々には、山から湧水の恩恵もある。作者はある日の旅先で冷たい水と桜、そして雄大な富士の姿を手に入れた。スケールの大きな御句である。

◇身の辺り（五月号）　栢尾さく子

春疾風空ゆくものの皆急ぐ
ところどころ風立ち花菜畑かな
雨粒をはじく葉蘭や利久の忌

思い掛けずに激しい風が吹く「空ゆくもの」は雲であり鳥であり飛行機も居たかも知れない。疾風に飛ばされるように全ての物が急いで去って行く。風があるようには感じないのに、一面黄色の菜花畑のあちこちからフッと風が起る。花々のエネルギーなのか、それとも何かがそうさせているのか。不思議な現象に心を奪われ見ていて飽きない。茶道千家流の祖千利休の忌は陰暦二月二十八日。葉蘭は庭の隅や水辺近くに植えられる。長大な葉は生花又は料理の敷物として重宝される。常緑草であり雨を弾き美しく季語が相応しい。

窓開き空近くする春立つ日
桜見に角のきまらぬ握り飯

二月の立春は暦の上だけの春の感があり、雪国ではこの二月が一番厳しい。しかし、この日を境に何となく春を身近に感じる。窓を大きく開くと明るい空が思わぬ近さにあった事でそれを感じたのである。春もたけなわの今日はお花見に繰り出す事となった。子供や孫、知人友人そして句友、何方が一緒でも心が弾む。作者は得意のおにぎりを作るが、はてさていつもの美しい三角にならない。心の喜びが腕を鈍らせているのである。失礼ながら小学生の遠足のごと何とも可愛い作者に思わず拍手。身近を詠まれて素適です。

硯箱

◆季音五月　　井口俊晴

山笑ふ電気自転車充電中　　大村　節代

春が来た、春が来た、どこに来た、山に来た…。そう、窓を開けて眺めていると、山は優しい日の光を浴びて、日に日に春の装いに包まれていく。若葉の緑はまるで歌っているようだ。私もそろそろ巣ごもりをやめ外へ出よう。冬の間に鈍ってしまった体を鍛えなおそう。そう、サイクリングなんかいいんじゃあないかな。私のバイクは電気自転車。急な坂道も辛くない。さっきバッテリーの充電を始めたから、もうしばらくしたら出発だわ。

春の雷目玉ひん剥く仁王像　　境　延昭

うららかな春の午後、参拝を済ませて緊張が解け、鳥のさえずりに眠くなってきそうな気分だ。と、その時、ゴロゴロ、ピカッ。たった今くぐった山門が揺れたように感じた。雷である。薄暗い中、二体の仁王像は大きな目玉を、さらに大きく、まるで目玉をひん剥いたようにして突っ立っている。筋骨隆々の仁王像でも、さすがに雷は怖いのかもしれない。だって、お臍を丸出しだから。

教会の木椅子の窪み余寒あり　　永野　史代

日曜の朝の礼拝。春は名のみ。まだまだ寒い。手袋やマフラーをとって神父様の説教に耳を傾けていると、石の床から冷気が立ち上がってくるようだ。いま座っている木の椅子は、長い年月を経てすり減り、人々のお尻を包み込むように窪んでしまっている。飾りも何もない質素な椅子の表面はただ硬く、寒さだけが伝わってくる。

少年の夢は飛行士木の芽吹く　　高島　寛治

新聞やテレビによると、男の子が将来なりたい職業のトップはサッカー選手だそうだ。しかし、少年の夢はちょっと違っている。パイロットになりたいのだ。人々の声援を浴び、いま人気のスポーツ選手がいけないと言うつもりはないが、夢にあふれた少年の話を聞くと、ちょっとばかり頼もしくな

る。たった一人で、鳥のように大空を飛んでみたいという孤高とも言える夢は、いかにも男らしい。そんな風に感じるのは、こちらが歳をとったせいか。樹々が一斉に芽吹く春、少年に幸あれ。

いかなご漁打ち切りの島忌を修す　　森本　早苗

瀬戸内海の春を告げるいかなご漁。そのいかなごが歴史的な不漁にあえいでいる。二月二十九日に解禁になったものの、三月六日には打ち切りとなってしまった。私は知り合いが毎年家で作り、送ってくれる甘辛い「くぎ煮」を楽しみにしてきたが、今年は「少ししかなくてゴメンナサイ」と手紙が添えられて届いた。不漁の理由はいろいろあるようだが「海がきれいになり過ぎた」ことも原因の一つとか。水清くして魚住まず。かつては海がいかなごの大群で真っ黒に見えたほどの瀬戸内の島、忌を修すとの言葉が重い。

黄砂降る睨みのきかぬ鬼瓦　　川崎　道子

黄砂の季節がやって来た。はるか遠くゴビ砂漠やタクラマカン砂漠の黄色い砂を巻き上げ、季節風に乗って来る黄砂。シルクロードのロマンとは程遠く、洗濯物や自動車に降り注ぐから厄介だ。屋根の上で睨みをきかす鬼瓦にとっても、こればかりはどうにもならぬ。かっと見開いた目に砂が飛び込んで痛そうだ。強そうな鬼の、なんとも情けない様子が愉快である。

鉛筆の芯五ミリに揃へ大試験　　福田　千春

明日は入学試験。一年間の精進の成果が試される日だ。鉛筆は力が入ってボキッと折れてしまっても慌てないよう、普段より多めに用意しておこう。それから、これが私の肝心要の芯の長さ「五ミリ」。これより長くても短くてもいけない。先が尖りすぎていては困るが、とにかく五ミリに揃えておく、その点が肝要だ。名刀は日ごろの手入れが大事。微分積分、英文和訳、さあ何でもかかって来い。

勉学を解き放たれて春スキー　　松山　清子

受験勉強を乗り切り、見事、第一志望に合格した。もうすぐ家を離れ、大学がある遠い街に旅立たねばならない。喜びと解放感に浸って、つかの間、春スキーに興じる。痛いほどの日差しを浴び、斜面に思い切り大きくシュプールを描く。ゴーグルをしていても、真っ白な雪の照り返しが眼に痛いほどだ。気をつけないと、かなり雪焼けしそうだ。

季音雪

初鰹

大村節代

蒼天に余命預くる麦の秋
麦の秋水晶玉に過去未来
生き延ぶは父の口ぐせ初鰹
江戸ッ子を気取りありつく初鰹
雅男（みやびを）は作務衣に着替へ初鰹

桐の花

栢尾さく子

桶の水ゆらして運び春の星
崖上にかすみきれざる人動く
生薬を飲みて遠目や桐の花
足もとの岩間にうつぼ五月来る
前世から雨降り止まず蟇の鳴く

卯の花　菊池ひろこ

卯の花へ消毒液の霧重し
郵便箱たびたび覗き抱卵期
浅く掛けピアノを弾くも衣替
更衣離れ座敷も見て回る
雲切れて一村蝌蚪の水うごく

永日　五明昇

傾げ合ふ石塀小路の春日傘
鳥の巣も氏子中なり御神木
春昼や発条ゆるぶ鳩時計
藤房ののれんに透ける阿弥陀堂
チェロの音の洩るる洋館花水木

歌舞伎座の　境延昭

歌舞伎座の前に屯の春日傘
青麦に隣り合せの滑走路
つつ抜けの稚の泣き声菖蒲風呂
ポプラ新樹少年大志いだくべし
白焼の穴子にあはす灘の酒

菖蒲　椎野美代子

当てがはむ何れを鞘に此の菖蒲
菖蒲湯山中胸襟ひらく女われ
菖蒲の湯鳩尾突かれ死ぬもよし
くるぶしに精気誘ふ菖蒲の田
選りすぐる菖蒲の葉組たてまつる

竹の子　島津初花

白髪を水に踊らすヒヤシンス
夕空へ息吐く柿の若葉かな
二才児に手持が嬉し鯉のぼり
出石ソバ皿積み上げて花水木
竹の子や大釜据ゑて茹で上げる

夕焼坂　鈴木康世

蟻の列かくも静かに墓碑のぼる
棕櫚の花呪文となふる其処は墓地
葉桜や湖面まぶしき逆さ富士
大いなる水の躍動雪解富士
ゆくりなく人と行き逢ふ夕焼坂

初夏　田寺玲子

ブロンズの背美しき天清和
夏めくや磨かれてゆく銀食器
夏めくや水じやぶじやぶと夕厨
海鳥のかすむ日時計夏きたる
万緑の城址に白き角櫓

花一匁　永野史代

「花一匁」故里の葱坊主
牛島の藤見にゆかむ父あらば
白藤揺るるたびわが乳房ひやりとす
少年にブルーの恋や初夏の浜
蕗の皮剥き筋通す母である

五　月

西山貴美子

女禰宜来る素つぴんの五月かな
電球のわづかなぬくみ五月尽
一杖に身すがら委ね五月の野
逸り男も優男も交じへ五月祭
桐箱に仕舞ふ危な絵五月の夜

若葉風

波多野寿子

老らくや励まされつつ夏に入る
若葉風満面に受け子等と逢ふ
腰かけて万緑の庭見て飽きず
水音のひびく生家や花菖蒲
惜しまれて散る白牡丹友逝けり

光る樹

星野和葉

投函し身の浮くやうな新樹の夜
新樹揺れもしや鴉か近寄らず
新樹光ついと大きく深呼吸
先を行く犬の毛並や麦嵐
一杯なら許してくれむ初鰹

風

茂木和子

歩き初むる稚の背を押す新樹風
見ゆるもの揺れて新樹の風透明
欅大樹扇開きの新樹風
夜の新樹「思春期危機」てふ風のあり
ポケットの拳の熱し新樹風

夏はじめ　矢作水尾

海日永楔(くさび)の如く貨物船
夏はじめ海を一つに逗子葉山
絶筆の夫の一行藤の花
裾さばき美しき小紋や桜餅
過ぎし日を上手に畳み更衣

大漁旗　山中順子

朝虹や父ちゃんが振る大漁旗
さらさらさらと調べをつくる夏の朝
初夏の風肺をひろげて食べておこう
葭切の青臭く鳴く船着場
卯波立つ湾の一日の疲れかな

母の日　山中みどり

聖五月不要不急と言はれても
人間こそ最強ウイルス若葉風
いつもより濃いめのカフェオレみどりの日
瞳の色が母に似てきてカーネーション
母の日のほのかな悔いと贈り物

吹流し　由良ゆら女

雲梯のきざむ大空吹流し
庭にふと小さきあやめの濃紫
名筆にそへて金言燕子花
万緑に傾ぐ一点野立傘
招かれて懐紙につつむ枇杷の種

菖蒲湯　吉住光弥

人類に妙手少なし遍路杖
救急の車分けゆく夜の新樹
葉桜や手窪に湧水啜り飲む
たどり付きし老たふとけれ夏の果
禍を家族菖蒲湯溢れさす

蝌蚪なるや　網野月を

足が出て蝌蚪腕出て来ても蝌蚪なるや
楽譜通りに弾かねばならぬ蝌蚪の群れ
夏めくや右の足指反り返る
白襲自棄に気になる喉仏
鼻筋が際立つてゐる薄暑光

気掛り　石井喜恵

永き日のまだ揺れ残る母の椅子
菖蒲湯や子の言ひ訳に巾ができ
母の日の母はいつもの割烹着
気掛りは未完のままの小鳥の巣
鳥の巣や切るをためらふ枝一本

鯛の尾頭　石山かつ子

ここだけは嫁の外持田苗運ぶ
言ひかけて言へぬ一言若葉風
調達の鯛の尾頭端午かな
卯波かな夕日に映えて防波堤
母の日や母の鼻唄楽しげに

愛鳥週間

大橋廸代

母の日やかの子諌むる太郎の書

はつなつの稚魚列となり円となり

翡翠にうろたへ逆さ遠めがね

遠眼鏡いきなり川鵜排泄す

ドッジボールの悲鳴ものかは行々子

（順送り）

☆

☆

令和２年６月30日

水明俳句会 会員 各位

水明俳句会 主宰　山本鬼之介

「水明創刊90周年」全国大会・祝賀会について

水明５月号で、水明創刊90周年の記念行事を延期する旨をお知らせしましたが、その後の情勢を考えますと、延期した日程で実施が可能かどうか微妙な段階です。

７月の常任幹事会に於て充分討議して７月末には方針を定め、９月初めに発行予定の記念号（８・９月合併号）でその内容を発表します。

既に申込みされている方につきましては、行事内容に変更があれば、それに沿って申込金の精算をいたします。また、まだ申込みされていない方は、記念号のお知らせ内容に沿って対処してください。

いろいろとご心配やお手数をおかけしますが、事情ご理解くださいますようお願いいたします。

季音月

葦毛栗毛　丸山マスミ

疾駆する葦毛栗毛や新樹光
蚕豆剥く釣果自慢を聞きながら
阿修羅像の直ぐな鼻筋緑さす
夜上がりやほぐれんとする藤の房
大落暉海に傾るる青田波

戴きます　柚木治子

開け放つ朝の書斎に初夏の風
天と地をむすぶ勢の新樹かな
帯締むる去年より痩せし更衣
豆飯や「戴きます」の声通る
平凡の尊さ沁むる豆の飯

夏帽子　藤澤喜久

ハンカチにほのかな恋のしぐさかな
遠き日の忘れ物めく夏帽子
葱坊主此処は昭和のニュータウン
在へてコロナの巷豆の飯
安達太良や花桐高く位を保つ

一夜酒　小倉倭子

蝌蚪の紐ギターの弦を試し弾く
白衣脱ぎ女医の春服ひるがへる
言ひ訳は風邪撃退と一夜酒
手を離し心を繋げ二重虹
若葉風杜を抜けくる神楽笛

絹袷　荒井倶子

子の声の消えし校庭花水木
日照雨きて光の中の花水木
母の忌や茶箱より出す絹袷
絹袷をんなの悋気つつみこむ
高速艇の航跡はげしあごの海

ミニブーケ　森本早苗

胸像の市長微笑む芥子の花
病める師に君影草のミニブーケ
三粍の命救ひぬ天道虫
手遊びの花柄マスク時鳥
確率は四分の三毛虫捕り

浜風　宇田白鷺

一瞬の静寂のあり遠蛙
庭の木の下鶯の落し文
春の波小舟の底の藻のゆらぐ
浜砂の足裏くすぐる五月かな
夏めくや浜風ふはと生臭し

田鳥　鳥羽和風

沖の石白波遊ぶ立夏かな
落暉いま村に火が付く大夕焼
ぼうふらや水の暗さも藪住まひ
金魚鉢の隠れ弁慶草の中
夕焼を棚田に映す九十九折

海光　十倉和子

航跡を眼下に蜜柑の花匂ふ
防風林押しかたぶけて大南風
高台への避難路ひらけ青葉潮
群るる海猫上人窟を守る構へ
花海桐海の鳥くるレストラン

若葉風　高島寛治

春昼や前のめりなる磨崖仏
釣り上げしつの字しの字の穴子かな
墨汁のしたたる太字柏餅
礼拝堂の高き窓より若葉風
麦秋や旧天領を新幹線

蝌蚪生る　森田祥絵

葉桜や排泄長き牧の馬
種蒔や納屋には更の猫車
退屈な蛇籠の目より蝌蚪生る
筆談の身にしてジョーク麦の秋
明易し微熱のやうな朝刊開く

風薫る　川崎道子

紙飛行機の滞空時間風薫る
柿若葉本陣跡の井戸深し
押入れに籠り現像花は葉に
抑揚なき留守電の声若葉寒
夕薄暑持ち重りする旅鞄

マスクして　渡辺舎人

まがごとを祓ふ神代ゆマスクして
聴き比ぶ「愛は限りなく」マスクして
マスクしてゆるせし唇隠しけり
マスクして汝もペルソナのあらたしく
マスクして朝令暮改カタカナ語

柿の花　井上燈女

駐在の人柄もよし柿の花
麦秋や団地の中の一枚田
麦の穂の出揃ふ一村黒のつぺ
母と娘のピアノ連弾聖五月
来し方の昭和の街や七変化

地方都市　町野広子

街路樹に鳥の巣のある地方都市
藤の花入籍終へし役場前
山藤の絡み合ひつつ垂れてをり
芝桜踏まぬ気配り塗装工
葱坊主チビもノッポも肩組みて

籐椅子　臼井由美

籐椅子は亡き夫の座にありしまま
夏暁頭上に一線飛行機雲
母の数倍生きてゆつくり菖蒲の湯
葉桜や寺の番犬吠えに吠ゆ
芳しき定家かづらの落花掃く

青田波　池田雅夫

日の反射田を植うる顔火照る
曲り田の括(くび)れに痞(つか)へ青田波
夏草や城址ゆかりの柱石
くちなはに冷静を欠く荒法師
古箪笥黴の温床なりしかな

土佐訛　松本光子

宿の夕餉は一本釣りの初鰹
初鰹男をあげし土佐訛
花擬宝珠みやこに咲ける色をもち
中仙道昔名残りの花擬宝珠
木曽路行く新緑深き一里塚

聖五月　伊藤敦子

人も樹も四海目覚むる聖五月
五月朗朗音あるものは音を出し
丹精の一番咲きの薔薇供ふ
聖五月胎児のエコーに祈る無事
葉桜や城廓のなき城の址

夏に入る　加藤むら子

薄紙のやうな暮しや夏に入る
雨音を切り裂く五月の一番車
吾若き頃に母逝き母の日よ
裏庭の藤を称ふる我と風
口開けて餌待つ金魚朝ぼらけ

菖蒲湯　内田恵子

主役にはなれぬ私よパセリ好き
コロナ禍や祈り込め蒔く花の種
ふんはりと皿を食み出す穴子鮨
力瘤未だ小さく菖蒲風呂
固くなる頭に菖蒲巻き長湯

初節句　川野妙子

初節句キャッキャッと笑ふ赤子かな
武者人形飾り昼寝の赤ん坊
初節句壁の鬼面の微笑みぬ
思ひ出の山ほどありて薔薇ひらく
ほろほろと散る大き薔薇棘隠す

葉桜　岡野順子

葉桜やボール一気に空を切る
鳩くるや葉桜の影浴びてくる
鳩遊ぶ葉桜の影きりもなし
道の辺の葉の先光る春の霜
春の霜光りてぐさり身の内に

夏きざす　井関礼子

菖蒲湯に浸りてコロナ寄せ付けず
裏山の初筍のみづみづし
一煎を乾して新茶の茶摘み頃
摘み来たる蕨菜とし堪能す
夏めくや日がな青虫駆除もして

葉桜　大場順子

春昼の音なき音や砂時計
葉桜や江戸のなごりの常夜灯
初夏の風藍職人の藍の衣
おかつぱに菖蒲かざして菖蒲風呂
潮の香の届く老舗の穴子鮨

濃山吹　山田美佐尾

篝火や白魚漁の舟傾ぐ
濃山吹こけしの一つ横を向く
砂浜に君の名を書く夏の海
海底に沈みゆく艦卯浪荒れ
調子とる男の手捌き夏祭

薔薇垣　森川義子

薔薇垣や女独りの灯を点す
終の地と決めしこの町若葉風
滑空のあごのしろがねびかりかな
飛魚や海の男の茶碗酒
馥郁と民話の宿の桜餅

鶴　原田想子

こふのとり巣立ちの風に跳びはじむ
咲いて飛ぶたんぽぽの旅してみたし
片陰やひと息ついて更に道
草笛の少年に蹤く少女かな
生垣を破る一本鉄線花

夏めく　松宮保人

結願や遍路安堵す顔と顔
種案山子親爺の野良着着てをりぬ
茶畑の名残り留めし杉林
夏めくや山城跡の野面積み
産土は黙し新樹の息遣ひ

季音花

伽羅蕗　野口和子

耕して土と遊べり小半日
伽羅蕗やインクの滲むレシピ帳
柔かき棘の数多に柚子新樹
抱卵の燕に魅入る家籠り
若葉寒法話抜け行く古刹かな

薔薇の午後　梅澤佐江

草餅に添へ水天宮の守り札
母の日を母となりたる子に祝がる
ファラオの墓に妃の愛の矢車草
開け放つ初夏の窓よりビバルディ
純白に翳りの見ゆる薔薇の午後

川底　矢島清

川底の飯粒ひかる桃の村
一病の疼き出したる走り梅雨
滴りの音かさならず百の穴
画架立てて筆にふくます藤の色
紙風船年の数だけつけぬ年

夏はじめ　松井由紀子

心音を医師にあづくる夏はじめ
新樹林息ととのへて歩み入る
棟梁と父のあれこれ塩辣韮
書きぐせの遺るペン先走り梅雨
天道虫愛(かな)しと見ればつと飛べり

夏　菅原知子

裏山の一木一草夏兆す
蝌蚪生れて飛び乗る気配五線譜に
蛙子に手足生ゆればバタフライ
ちりぢりの蝌蚪の思はく岩の陰
蕗むくや親指の爪黒くして

ビタミンD　福田千春

初夏の陽にビタミンDの充電中
廃業の百年老舗花は葉に
メーデーはネット配信鬨の声
芝桜咲く長屋門より耕耘機
北の旅無邪気にさして蕗の傘

若葉の息吹　井上玲子

満身に若葉の息吹富士樹海
平らかに一日を終はり菖蒲の湯
風そよぐ屋形の船や穴子丼
尼寺の池に影おく著莪の花
衣更へて指先をどるジャズピアノ

袷着る　井口俊晴

紺絣母が遺せし袷かな
稽古の日帯をきりりと袷着る
人消えし街に盛りの花水木
親は去りベビーブームの蝌蚪の池
西域のロマン無縁の黄砂降る

牡丹寺　西浦千枝子

六文銭の幟とりまく牡丹寺
父の葬終へて安堵や合歓の花
愛犬に愚痴ぶちまけてアマリリス
牡丹咲く帽子の好きな母と居て
著莪の花傷つく程にこみ合うて

御霊屋　松山清子

夏鶯島へ手こぎの渡し舟
池の面の鳳凰堂に青葉光
大門の草鞋ゆれたり夏つばめ
御霊屋の厨子の金紋新樹光
崖下の墓所の一隅著莪の花

新樹風　中野彊

占ひ師の灯火ゆらめき五月来ぬ
青梅のぽろりこぼるる朝の土
新樹風閉ぢたるままの花の店
深呼吸新樹の色の胸の底
新しき赤い踏み台柿若葉

犬ふぐり　秋山冷子

山笑ふ遊び癖つくスニーカー
つばめ来る新作菓子のベーカリー
弟が大きく見ゆる種下し
雑草じゃないと言ひ張る犬ふぐり
地境はなんのかんのと福寿草

コロナ群　上戸千津子

春愁や令和歴史にコロナ風
夏兆し庭の雑草三密で
春闇や世界相手にコロナ群
母の日に確と聞こえし妣の声
六甲より神戸みなとや青葉風

家籠り　後藤綾子

五月晴れ玻璃戸磨きて家籠り
蚕豆とジョッキでグイッと憂さ晴らす
容赦無く流れ来る香よ栗の花
蜘蛛の子散る雨降る様に糸つけて
籐椅子をゆらしこの世を如何にせむ

借り畑　野平美紗子

借り畑のかはゆき佳人天道虫
借り畑廻れよ廻れ矢車草
根切虫も命の一つ借り畑
嬉嬉として絹莢摘む子借り畑
夕映えや茅花流しの中を行く

水神の手　正木萬蝶

蝌蚪に手足ひとに思春期変声期
水神の手のひら広し蝌蚪生るる
蛙子や今は廃れし童唄
行宮を覆ふ吉野の花は葉に
あかときの地震やり過ごす朝寝かな

夏行　近藤徹平

脱サラの婿が住持に夏百日
夏籠や尼僧唱ふる七五調
ダムの天端に祝詞朗朗若葉風
終点の四囲悉く弥生山
朝寝して耳を澄ませば鳩時計

青田　大塚茂子

呼び交はす声透きとほる青田風
路線バスにゆつたり映る青田波
駆け付けて父となる日や青嵐
臍大き男の子生まれてソーダ水
虹追ひかけて走る少年越辺川

四月尽　石田慶子

蝌蚪住まふ手水鉢ある無住寺
おたまじやくしを指で圧さふる都会の子
蕗剥くや祖母の厨の黒光り
カナッペに乗せる蕗味噌ワインの日
大声で笑ふことなく四月尽

柿若葉　熊倉千重子

歩を馴らす初夏の神馬の眩しくて
悔しさを撥条に男の子よ柿若葉
逢へぬままの師との別れや夏はじめ
採り立ての青さふつくら豆の飯
雨の後揺るる輝き青楓

宮殿　河野はるみ

お玉杓子つつく八重歯の双生児
散策の額に袖に初夏の風
暗号で呼びあふ小鳥初夏の庭
ロドリゴの調べ抜けくる薔薇の門
食卓に薔薇を飾りて待つ幾夜

若葉風　下川光子

父と待つ一番乗りの菖蒲風呂
鯉幟連なる山の校舎かな
高々と後は風待つ鯉のぼり
田に響く応援歌かと雨蛙
若葉風深呼吸してまた歩く

草刈機　田中章嘉

札所来て多き石段若葉中
夏草や後継ぎ逝きて田仕舞ひす
草刈機小石を噛んで撥ね飛ばす
散り終へるまでの日課や竹落葉
水無月の旅の予定も定まらず

春愁　飛永鼓

耕運機の音重重し春愁
形無きものに追はれて春愁
道の辺の分厚き白の落花かな
肩に蝶童話の世界生まれけり
蝶舞ひて上へ下へと無重力

花は葉に　宮﨑チアキ

花は葉に文鳥を飼ふ休校児
青年と思ふ新樹の雨後の幹
大輪の花と競ふや柿若葉
甦る青春の日よ更衣
田植機がきちんと植うる水面かな

☆

☆

「現代俳句カレンダー 2021」販売のご案内

昨年から体裁が一新され好評を博しました現代俳句カレンダーの注文受付を開始します。今年も引き続き多くの会員のご注文をお待ちしています。

◆体　裁：Ｂ４判の上下二連
◆価　格：1,200 円／１冊（定価の２割引）
◆注　文：下記の通りお願いします。
葉書に、①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号②注文冊数③受取り方法〔発行所で引取・自宅又は指定先に発送〕の３項目を明記する。
葉書の宛先は、〒 330-0064 さいたま市浦和区岸町４-10-21
水明発行所カレンダー係
◆備　考：水明俳句会より４名の俳句が載ります。
３月　星野和葉・椎野美代子　　６月　山中順子
８月　山本鬼之介（短冊揮毫）

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。
※ご不明の点については、「総務部　日高　徹」TEL048-822-8370　090-2122-1223 へお問合せください。

水明俳句会　総務部長

俳誌望見

梅澤　佐江

『雪解』　令和二年四月号　通巻八八一号
主宰　古賀雪江　発行所　神奈川県横浜市

昭和二一年、皆吉爽雨が東京で創刊。師系高浜虚子。「客観写生を基本に自然と人生を深く凝視する」を理念とする。（月刊）

主宰句「寒明」一五句より

寒明の玻璃一枚に日の熾ん

待ちに待った寒明、硝子窓から差し込む目映いばかりの日の光に、厳しい寒さから開放される安堵感が座五の（日の熾ん）に凝縮されている。

横抱きにパンの一本春立ちぬ

フランスパンを一本買い、浮き立つ心でパリジェンヌの様に小脇に抱えて颯爽と歩いている。（横抱き）と（春立ちぬ）の取り合わせの妙に春への期待感が溢れている。

一塊の鉢の土から芽吹くもの

春になり、ひとかたまりの鉢の土の中から何やら萌え出る芽を見つけた。ものの芽のほぐれる明るさは正に生命力なのである。

豪商の琴を片寄せ雛飾る

本号に「日野ひな祭り紀行俳句大会」の記があり、近江日野商人の屋敷と思われる。（琴を片寄せ雛飾る）に、行商と多店舗開設で繁栄した当時の暮らし振りが偲ばれる。

峡深く雛の黄昏惜しみけり

山間の日暮は早い。桟敷窓から眺めた雛飾り、弁柄塗りの軒の低い昔ながらの商家、どこか郷愁を誘う風景にもいつしか夜の帳が降りる。刻を惜しんでいる作者である。

花幽集　三名　各一〇句より　一句ずつ

御酒撒いて一鍬下ろす農始　石垣青葡子

吉兆買ふ大福耳の男より　岡本　欣也

足湯に人野畑にも人寒温く　富本　章三

聲遠集　一六名　各五句より　二名を一句ずつ

海鼠突き首を縮めて戻り来し　加畑　霜子

鏡びらき汁粉の用意してありぬ　久保田育代

雪韻集　一〇名　各五句より　二名を一句ずつ

寒の日矢降るに総立ち蘇鉄林　名越　奈緒

枯菊の香を束ねある法華尼寺　西尾　幸子

泉聲集　一七名　各四句より　二名を一句ずつ

霧吹いて苔に艶増す福寿草　田川　蘭子

冬麗の朱雀門ぬち凧揚がる　鶴嶋　博子

雪間集　五二名　各三句より　二名を一句ずつ

晩年が追ひかけてくる年の暮　三宅せい子

何もなき道路に一羽初鴉　三宅まさ子

理念に則り、「観るということ」「考えるということ」「表現するということ」をしっかりと実践されている。

現代俳句鑑賞

網野月を

教室に招かれてゐてシャワー浴ぶ　中川　雅雪

（『俳句界』5月号・新作巻頭より）

上五中七から座五へ跳ぶ意外性は絶妙だ。もちろん実際にあった行動であろうかと思う。「教室」とは俳句教室なのか？分らない。自分が先生なのか生徒なのか？座五の「シャワー浴ぶ」も運動して汗をかいたからなのか？出掛ける前の身だしなみなのか？様々に想像するところである。中七の「……て」は通常原因結果を結びつけるもので、説明的とか、散文的であるとか嫌われるが、掲句の使用法は奏功している。

陶椅子のわづかなぬくみ夜の新樹　松田　吉上

（『俳句界』5月号・青畳より）

座っている内に温められて「ぬくみ」が出来たのではなくて、一度この作者は椅子を離れているのであろう。または座り直したのかも知れない。そして「陶椅子」に残る「わづかな」温度差に気付いたのである。それくらい新樹の季節にあってもまだ夜には肌寒さが残っているのである。座五の「夜の新樹」の置き方が新味を持たせている。

三つの川ひとつの音となる立夏　小西　祭

（『俳壇』5月号・立夏の季語讃頌より）

三筋の川が合流していることを「ひとつの音となる」と表現していて、分かり易い。この作者には川を認知する感覚の一つに聴覚があり、その聴覚を強調しているのである。もしくは合流した後のこの川の川音が大きい音（もしくは特徴的な音）なのであろう。季語「立夏」の季感が申し分ない。

さくら散ることばが離れてゆくやうに　衣川　次郎

（『俳壇』5月号・さくらより）

上五の季語「さくら散る」を中七座五が直喩で表現している。花弁の一枚一枚がまるで言の葉であると言っているようである。まるで心の奥底に秘められた、想いの文に込められた言葉が解き放たれたように思われる。この散るさくらの花弁は、きっと誰かの心に届くに違いない。俳句には様々な効用があるものだが、掲句のような祈りに似た句は琴線を弾きます。

美しいデータとさみしいデータに雪　正木ゆう子

（『俳句』5月号・草を踏むより）

現代の俳句の最前線を走る作家の一人である。今となっては「データ」はカタカナではあっても然程新しい言葉ではないだろう。この作家にしては尚更である。ただそこに「美し

い」「さみしい」と対のように付加されると、この表現の斬新さにはひたすら脱帽なのである。

他に「ある日見上げし夜なべの母の糸切歯」がある。この句は「…見上げし…」で表現される母と自分の位置関係が命であろうかと思う。

横むきの骨牌（カルタ）の王妃春の雨　前川　弘明

（『俳句』5月号・真紅の傘より）

「骨牌」には「カルタ」とルビがあるのでトランプのことと考える。トランプだとすれば王妃はスペード、ハート、ダイヤ、クラブいずれも横向きに描かれているものはない。実は完全に横向きで片目で描かれているのは、スペードのジャック、ハートのジャック、ダイヤのキング、の三枚だけである。ちなみに解説本では四十五度斜め右ないし左を向いているという解釈も成り立つようであるが。斜に構えているということでしょうか。……ですから掲句は虚構かも知れません。虚構だからこそ座五の季語「春の雨」の儚さが共鳴しているのである。確信犯的な作法である。

雪よりも風の百日伊賀盆地　宮田　正和

（『俳句四季』5月号・山繭より）

伊賀に住み暮らす日常から来る実感の句である。その「伊賀盆地」に雪が降っている。筆者は上から下へ真っ直ぐに降る雪を想像した。もしかしたら雪交じりの風の日かも知れません。それにしても雪の日なのである。。嗚呼、珍しく雪の日になったなあ、という詠嘆の句である。実感から来る硬質な詠嘆が句を盤石にしている。

ポケットの春は紙くずとともに　鎌倉　佐弓

（『俳句四季』5月号・今からここからより）

ポケットの中に長くあった紙片を出してやった、と筆者は解した。それにしても春をポケットの中に見出し、その中にあった紙片「とともに」春が来たと叙する感性はどこから来るのであろうか？

他に「チューリップ今からここから私の時間」がある。

腕組むは父の遺伝子花菖蒲　東　國人

（『千葉県現代俳句集成2020・山椒魚より』）

お父様の面影を偲びつつ、自分が父親に似てきたことへの感慨が詠まれている。この年齢になれば、ポジティヴでもネガティヴでもないのである。遺伝子であるから、つまり必然として叙されていることで判る。ちょっとばかり嬉しかったりしているかも知れない。作者が若い頃は、父親の癖に引っ掛かりを持っていたのだが、今となって自分がしていることにふっと気づいたのであり、内心苦笑のような心持なのである。いくつもの感情を綯い交ぜにして叙することもまた俳句なのである。

他に「裸婦像の胸囲を測る尺取虫」「それぞれに曲がる胡瓜の自由主義」がある。

自選二十句

日髙　徹

啓蟄や父の書斎に女性客

枝折戸を押す手に春の霙かな

二の腕の白さ気にする少女初夏

カルタゴの海の青さよ花石榴

湯上がりの体に刻む寝莫莚あと

天井にドスンと蛇の落ちし夜

甦る父の遺品の登山靴

マネキンの着替へしてをり夜の秋

髭さする土用芝居の女形

水澄むや湖底に揺るる赤鳥居

台風の眼を突き抜けしかもめかな

「外郎売」の口上長し秋まひる

二科展の裸婦の写真の黒リボン

枯菊や母の介護に残る悔い

夫々の家それぞれに聖夜かな

常磐津に浸るひと日や一葉忌

松過ぎて客待つ車夫の力瘤

目が覚めて夢の彼方へ宝船

笑はせてなぜか悲しき猿廻し

初山河マウスで描く招き猫

TORUの鉈

網野　月を

おめでとうございます。

水明に入会されて、満四年の成果が発揮されたものと考えています。確か昨年度もチャレンジされていたと思います。敢えて昨年度のイメージと比すと作法の広がりがあったと考えられ、それが受賞の主な要因ではなかったかと考えています。

氏の句の特徴は、有季を柱とする作法の型です。そして正格なリズム感でしょうか。ご自身の風貌と同様に背筋を伸ばし胸を張った姿勢の作法が身上のように思います。同時にその姿勢の正しさというか礼儀正しさが、今迄ある種の堅苦しさにも繋がっていたように思っていました。が、今年度の新珠賞の受賞作品を拝見すると、句作りに、特に叙法に伸びやかさが加わり、その分艶が増し、奥行きも感じられるものとなっているように感じます。著しく抽斗が増えたのでしょう。もしかしたら抽斗はもともと沢山に持っておられて、その関連性ネットワークの構築がより密に張り巡らされたのかも知れません。

受賞作は先月号に掲載されていますが、もう一度見直すことにして、採録します。

寒晴や小江戸で拝む富士真白
裏窓に聖樹と少女蔵の街
虎落笛棒付きの飴二つ買ひ
つはものの生死を分けし白襖
雪催息を潜むる御神木
淑気満つ午前零時の時の鐘
初明り力漲る鬼瓦
女正月貸衣装屋に外国語
初大師鳩も並ぶや氏子中
鯛みくじ大吉釣れて初笑ひ
寒の入父似の羅漢見つけたり
福詣御朱印帳に令和の字
松過や嫗の唄ふ「通りやんせ」
左義長の人は紅山は闇
春を待つ一番街にKOEDOの香

作句の叙法においても、また句意の深さにおいても工夫の感じられるものばかりでありました。叙法においては、十五句中、季語を単独に使用する句が三分の二を占めています。「寒晴や」「虎落笛」「雪催」「淑気満つ」「初明り」「女正月」「初大師」「寒の入」「福詣」「松過や」「春を待つ」がそれで、季語を上五に配置することで中七座五に在る句意を導き出しています。二物衝撃、いわゆる取合せの手法ではなくて、季語に拠る時空間の設定であったり、またはテーマの方向性を指

示する役割を季語が担っていると解釈できます。「白襖」と「初笑ひ」は中七からの繋がりで季語が誘因されています。また「左義長の」は中七へそして座五にも繋がるように工夫が行き届いています。十五句の中にこれらの句が楔のように配置されて、リズムのマンネリ感を払拭する様に構成されています。

季語のいわゆる本意・本情への解釈が一層深められた結果であると思います。例えば「虎落笛」の句は、季語の取り扱いに工夫があり、句意との距離感を引き出すことに成功しています。また「寒の入」の句は、喜多院の五百羅漢を題材としているのだと思いますが、人業の全てを刻した五百体に御尊父を見出されたのでしょう。初め「・・捜したり」のほうが作者が顕わになってよりいいかなあ?と愚考しましたが、時間がたつとともに吟行の句座なら兎も角、活字にした際は掲句のママが最善手であろうという考えに至りました。何といっても座五の「・・たり」の余韻が尊いです。此処に礼儀正しい作者の御性格が垣間見られるのです。将に真骨頂でしょう。筆者は「つはものの」と「寒に入」が好きです。

さてノートを構想するに当たって、氏から自選句を送って頂きました。その中から幾つかの句を紹介しましょう。

カルタゴの海の青さよ花石榴
マネキンの着替へしてをり夜の秋
台風の眼を突き抜けしかもめかな
夫々の家それぞれに聖夜かな
笑はせてなぜか悲しき猿回し

「カルタゴの」は座五の季語「花石榴」が有効に働いています。「マネキンの」はシュールレアリスムさえ感じられます。「台風の」は「突き抜けし」に作者の強い意志を感じさせます。「夫々の」は日本の民俗的なクリスマスの在り方を的確に叙しています。「笑はせて」はエスプリの効いた構成の中にあるペーソスを描いて余りあります。俳句は十七文字ですから、一つのテーマに即した方が焦点が絞れて成功することが多いと思いますが、掲句は人間本来の綯い交ぜになった情感を表現していて、成功しています。

受賞作品も自選句も俳句の王道である即物的叙法を中心にしながら、構築している点が読み手に氏の紳士的な温かみを感じさせているのであって、好感度抜群の句評に結びついていると思われます。

最後に氏から頂いた資料を見てみましょう。

初秋や風のゆくへを背伸びして
初秋や都心の月は白く見え
秋海棠求めて一人いなか道

この三句は、氏が平成二十八年八月の「りそな俳句会」に出句されたものです。氏の処女作品と言って良いでしょう。第一句は、その句会で光二前主宰の特選に選された句です。氏曰く「特選を頂き、俳句にのめり込むきっかけとなりました。」とあります。特選句の座五の「背伸びして」はそのあとに「見ていた」「目で追った」と言う意味の動詞が省略されています。そして上五に戻って「初秋」を感じたのだ、と言うことでしょう。俳句にのめり込むことが氏の必然であったと改めて思う秀句です。

自選二十句

染谷　正信

門前の蕎麦打つ音や水温む

筆箱にちひさな秘密桜貝

黒猫が膝に重たく春愁

墨堤に団子二皿春惜しむ

桜桃や絶えて久しき斜陽族

煩悩はまだまだ盛ん泥鰌汁

秋立つや土産物屋に投句箱

点滴の雫速めよ鰯雲

虫時雨山の出で湯を独り占め

墓碑銘は信女と信士秋日和

畔道をぢんぢんばしよりゐのこづち

土壁の一茶の旧居草紅葉

古地図手にめぐる本郷小春空

黄葉や帝都の駅は赤煉瓦

木枯や怒濤の海に星光る

農政を論じて滾る牡丹鍋

底冷や鞄に捜す家の鍵

命ある限りは生きよ冬の蠅

初売や蔵ある町の触れ太鼓

髪束ねきりり弓引く寒稽古

正信讃歌

高島　寛治

今から五年前の平成二十七年六月、大宮読売俳句教室（指導者は故光二前主宰、現在は山中順子運営幹事長）に一見、学者肌風、温厚で物静かな印象の正信さんが入会した。折りしも、その日は浦和パインズホテル内の日本料理店で、新珠賞受賞者（大場順子さん）のお祝い会兼句会の日でもあり、正信さんは入会時の記憶は極めて鮮明だという。

当教室からはこの五年間でこの度の正信さんの新珠賞を含めると水明、季音賞合わせて五つの賞を頂いた。特に新珠賞でいえば五年間で三人受賞という事となった。この事も凄いが、正信さんの初めての応募にして受賞というのも見事だ。

さて受賞対象作品より四句ほど列挙させて頂く。

廊下這ふ赤子の尻へ若葉風
炎昼や浜の男の子は赤ふどし
晩学のアテネ・フランセ秋灯下
地球儀をリボンで結び降誕祭

生命讃歌という題に沿って人生の春夏秋冬を謳ったこれらの句、季語を大切にし、人の命、一生を語らせた句の数々である。

正信さんは昭和二十二年五月、埼玉県羽生市生れ。農家の長男であるが弟に家業を任せ、昭和四十五年明治大学を卒業、自動車関連の会社勤務後、平成二十三年五月定年退職、以後四年間、読書三昧の第二の人生をスタートした。正信さんが生まれた昭和二十二年といえば、五月に日本国憲法発布、九月にはあのカスリーン台風、利根川は栗橋附近で堤防が決壊、関東東北の地域に甚大な被害をもたらした。私事ながら私の幼き頃の写真は母の実家（杉戸）にあったが、全て無となった事を母から聞かされている。

さて正信さんの多感な青春時代といえば、昭和三十五年から四十五年辺りで、高度成長期を背景に豊かに発展する昭和の空気を十二分に吸って成長したのである。そして定年退職後の四年間は俳句を始めとして文学、文芸全般の知識を深める充電期間となった。特に俳句に関しては江戸、明治、大正期の俳人や小説家の句集に傾注し、一茶俳句二千句、おらが春、漱石句集、芥川龍之介句集、蕪村句集など読破した。しかも現在絶版となっている荷風句集を探して読みたいと言っており知識吸収の貪欲さには敬服する。

ここで正信さんの初期の作品をみてみよう。

残生を昼顔のごと過したし
水芹や籠にあふるる深緑
菜園にくるぶし埋もる春の土
風わたる鮎焼く店の薄畳

一句目、昼顔の根っこは深く強い。残生をしっかり歩まんとする気概を感じる句だ。正信さんは季語に造詣が深く、従ってそれを特に大切にする作風である。しかし、ときたまであるが、多少難解な句も目立った時期でもあった。

次に自選二十句の中より私の好きな句をみてみよう。

筆箱にちひさな秘密桜貝
黒猫が膝に重たく春愁
桜桃や絶えて久しき斜陽族
煩悩はまだまだ盛ん泥鰌汁
点滴の雫速めよ鰯雲
畔道をぢんぢんばしよりゐのこづち
農政を論じて滾る牡丹鍋
底冷や鞄に捜す家の鍵
初売や蔵ある町の触れ太鼓

これらの句は句会や水明の俳句大会での特選句が主体であるが、他誌等への投句も混じる。前記の初期の作品と較べると一段と深みを増している。また中七の旨さも光る。一句目のちひさな秘密、二句目の膝に重たく、順に絶えて久しき、六句目のぢんぢんばしより、七句目の論じて滾るなどなど。三句目の斜陽族の句からは太宰治の小説を愛した者でないと斜陽族の言葉は出てこない。四、五句目泥鰌汁、鰯雲の季語が全てを語る。六句目のぢんぢんばしより、かような言葉を善くぞ御存知と感心してしまう。七句目の牡丹鍋、白熱したであろう議論の中味まで読み手に伝わってくる。八句目、日常の出来事を切り取った句だが底冷の季語が生きている。九句目の初売の句、この句は新春俳句大会での特選句、新春に相応しい明かるい気持の良い句である。触れ太鼓の音が聞こえてくるようだ。

前にも述べたが、正信さんは季語（季題）にはこだわりが強く、大切に扱う。それ故さらに深い理解を求めて江戸期の俳人の句集はもとより多くの句集、書物からも知識を得ようと努力されている。

季語の話で最後になるが、稲畑汀子先生（ホトトギスの名誉主宰・高浜虚子の孫）は最近の新聞で次のように語っている。『季語はさまざまな名句で使われたという裏付けがあり、過去の俳人が磨き上げて選ばれてきた言葉。俳句を学ぶならば、季語に感動を語らせることを常に考えてほしい』と。

おめでとう正信さん。愛する俳句の道が、我々の人生に寄り添い苦しい時も悲しい時も我々を救ってくれる、そして生きていく力となってくれると信じて。

自選二十句

梅澤　輝翠

外燈に人影淡き余寒かな

天仰ぐ畦の老爺よ春浅し

前足に春光集め馬のどか

寝転んで輝く海を見る日永

風光る新車のドアの開けしとき

黒塀の寺町ひとり行く薄暑

母の待つ一本道に雲の峰

白百合を抱へて君の誕生日

麦の秋映し絵のごと版画彫る

かたつむり恋の相手か歩み寄り

ダージリン香る夕さり秋果盛る

助走するアキレス腱や天高し

敬老日漁師の背広座りをる

今は昔の遊廓あたり枯芙蓉

北国の祝言の帰路冬昴

聞こえくる土押し上ぐる霜柱

寒波来る白波立てて日本海

冬麗ずどーんとのびて猫と寝る

ぽつぺんは小樽の漁師のみやげもの

門松が吸ひ込まれゆく巨大ビル

潮騒に和す

石井　喜恵

輝翠さん、何と素敵な俳号でしょう。別所沼俳句教室受講生より三人目の快挙、そして初めての新珠賞挑戦での受賞おめでとうございます。

平成二十六年四月別所沼公園緑地協会での「第一回はじめての俳句教室」で受講生として梅澤テル子さんにお会いしたのが最初です。第一日目、二日目の講義の後、三日目はいよいよ別所沼周辺の吟行です。十人ずつ二班に分れ、各々会話を楽しみながら句材を求めて散策しました。その時。テル子（輝翠）さんとは良くお話ししたのを記憶しています。

季語のこと、俳句の楽しみ方、水明入会について等、質問されるままにお答えしたのです。とても熱心に聞いて下さって、私はてっきり入会を希望されると思ったのです。

ですが、当日二名の入会者の中に名前を見ることができませんでした。そして俳句教室も翌年、翌々年と回を重ねること三回目、何と輝翠さんとの再会です。やはり俳句を諦めたのではなかった。この二度目の講座出席を機に、水明誌友となったのです。

田舎家の四方八方涼しけれ

その年の夏行に初参加、三日目の良句は前主宰星野光二先生の入選となりました。

冬座敷どこまで入るや日の深さ
冴え渡る寺院の瓦冬近し
門松の吸ひ込まれゆく巨大ビル
春雲のひと筆描く水面かな
春霞海より使者の来たりけり
黒塀の寺町ひとり行く薄暑

早速、山本鬼之介主宰の指導の許「青葉の会」で、研鑽を積むこととなり、さすがに手堅い句作りは美事です。

冬の陽の射し込む座敷を詠んで、心の和む暖かさを感じる。三句目の〝ビルと門松〟は新鮮な目線である。銀座のデパート等で見る立派な門松、吸い込まれゆくのは我々買物客の方であろうか。作者の出身地新潟県北部に位置する村上城の城下町一帯は、黒板塀のつづく旅情あふれる街並である。ひとり行く薄暑にほのかな詩情がある。

花曇猫と遊びしひと日かな
保護されし仔猫を抱きて秋の月
愛猫を送る遅日の庭の隅

猫の好きな輝翠さんは猫を詠む句も多い。中でもこの三句は愛情のこもった心優しい句。実は大の犬好きな私でも思わ

ず引き込まれてしまう。

秋深み庭の草木にある愁ひ
悠然と浮かぶ水鳥目を閉ぢて
冬園に降つてきさうな星の数
外燈に人影淡き余寒かな
吊橋の下にも空や秋日和
迷路めく湿原の木に鵙の贄
コップ酒箸の先まで夏至の夕
みそ汁の湯気真つ直ぐに今朝の冬

写生句から日常詠まで細やかな感性が光る。庭の草木にも愁いを感じ、目を閉じて浮かぶ水鳥。確かにお堀の畔で見かけた浮寝鳥はじっと目を閉じていた。高山の溪谷に架った吊橋の下にも空があると云う。秋の澄み切った空気を存分に捉えて疑念の余地がない。湿原に鵙の贄とは珍しい、畦道などでは良く見るが、最後の二句、日頃の食事の景であろうが、〝箸の先まで夏至の夕〟〝みそ汁の湯気が真つ直ぐ〟など、美味しそうな食事の様子を活写して楽しい句になった。

そして、令和元年九月より山中順子先生ご指導の「雛の会」でご一緒している。水明発行所での句会には、赤いバイクでヘルメット姿も颯爽とやって来る。

秋果盛る丸テーブルの共白髪
日本海の波間を泳ぐ秋の月
寒波来る白波立てて日本海
ぽつぺんは小樽の漁師のみやげもの
春愁や紅ひきをへて鏡伏す

そして次々と順子先生の特選を物にするのである。雄大な日本海を詠んだ句は流石に力強くて圧倒される。海面に映る月を波間に泳ぐとは言い得て妙だ。

又、雛の会では時に〝袋廻し〟の句会をする。先ずは一人一句を当日持って行き、そこで他の人の作った句の季語で即席で作句する。慣れないと慌ててしまいます。その日、輝翠さんが出した句が〝ぽつぺん〟の一句です。皆、ぽっぺんなるものの実物を知らず、順子先生の説明のもと、何とか苦労して一句にしたのです。後日、輝翠さんが実物を持参して、みんなで吹いてみたこと楽しく思い出します。

五句目の春愁の句、今この世相厳しき時、〝鏡伏す〟の措辞に万感の思いが込められており、胸にずしりと迫ってきます。

新珠賞受賞作品より

夕陽落ち水着の少女沖目ざす
いかづちの光砕けて佐渡島
烏賊釣りの光の海へ流れ星
灰色の空にとけこむ冬の海
けちらして除雪車が行く夜明け前

山中順子先生が既刊の水明五月号で、「大物になる手応えは充分にある。このまま一歩も二歩も進んでほしい。」と大いなる賛辞を書き著しています。まさに水明期待の星なのです。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　新　暦文

囀や親子で探す森の精
逃水や水面に映る逆さ富士
バス停も校舎も桃の花の中
囀やひかり織り成す野点傘
「出席」に付するひとこと惜春忌

西幅　公子

茶はこびの人形止まる春の昼
赤子の笑みは百万馬力チューリップ
チューリップ遊戯と歌の三歳児
春の昼歩けば気づく百花かな
目を覚ます電車の揺れや春の昼

川口　野田　静香

百年の校舎を隠す桜かな
春星や五線紙にのる愛の歌
伊勢神宮に奉納の舞春の雪
スマホ連写笑顔にならぶ富士桜
囀を聞きつつ回る風見鶏

さいたま　渋谷きいち

下町の人情じんと春の暮
放課後にユーモレスクや春の暮
囀や猫の居座る吾が寝椅子
囀に吾が口笛のラプソディー
振り上ぐる拳納めよ桜餅

日高　徹

永き日や夕餉の匂風呂の音
桜餅隅田を渡る風に色
桜餅馴染の茶屋の緋毛氈
ふる里の山ははるかに啄木忌
海もとめ母を求めて三鬼の忌

曲淵　徹雄

永き日や木肌の色の湿り帯び
二人して一人静を屈み視る
雨を聞く一人静の裏鬼門
片方の靴と犬とが伏す春野
人影のなき車椅子鳥雲に

白壁に人と柳の影絵かな
若桜立身出世夢見しも
天元に初手の那智石風光る
窯元の破顔の朝や山桜
行く春の太極拳のテンポかな

さいたま　青木　鶴城

国境の馬頭観音雪椿
逆上がりできぬ子らにも木の芽風
山の子が乙女となりぬ木の芽時
千枚田の上へ上へとたんぽぽ黄
幼子のポーチの土筆顔を出す

保坂　翔太

小手翳し暫し見送る鳥雲に
味噌椀の貝の化身か小灰蝶
酒蔵の壁の白さや濃山吹
時わかずまはる水車や濃山吹
五平餅の暖簾褪せしや濃山吹

高崎　原田　秀子

新居へと向かふ荷物や鳥雲に
そよそよと水面に触るる濃山吹
目の前をふんはり蝶の無重力
寝返りのできし赤児よ蝶の昼
竹の子や闇の中より涌く力

熊谷　越田　栄子

春の野に広ぐる画帳草枕
一人静咲いて雨降る奥州路
指で押す赤子の頬つぺ桜餅
座布団を枕に鼾春の昼
不忍の池を半周春日傘

さいたま　染谷　正信

外出自粛どつと咲きゐる八重桜
童女笑む牡丹桜を簪に
信州は杏の花とコンサート
空(くう)を切り日へ舞ひ上る雲雀かな
家元の帯は萌葱よ春めけり

加藤でん治

初蝶の一途に舞ひてかがやけり
墨すれば墨の香とどく桃の花
鳥雲に群れて旋回乱れなし
春愁の樹々のことばを運ぶ風
展望台の五体を包む春霞

熊谷　神田　治江

休校の花壇に揺れてチューリップ
南国より戻る家族に春の雪
洗濯をするだけの日や柿若葉
世の無事を春満月に願ひけり
うつし世にただ立ち尽くす葱坊主

東京　石川　理恵

飛ぶものの影やはらかし春の野辺
春の野の息吹ありあり蝦夷地にも
春雷や雲取山の彼方より
一着の騎手はをみなや春の雷
向学心のさらに高まり卒業歌

上尾　横山　君夫

大嘘をつき合ひ笑ふ万愚節
猫除けのマット憂ひて草を引く
降る雪にけぶる音無き花の道
待ちあぐむ花の押し花広辞苑
丹精の押し花添へて花便り

東京　太田　絹映

春昼や蔵の人形振りむけり
春昼やパン屋の隅にベビー靴
清澄の空気切り裂き初雲雀
足早がゆるりとターンする日永
春愁や紅ひきをへて鏡伏す

さいたま　梅澤　輝翠

パステルを以て描きたき春の星
千鳥ヶ淵を満艦飾に朝ざくら
初蝶やローズマリーに羽休め
午後の陽の射し込む窓を黄蝶過ぐ
大いなる陣を整へ鳥雲に

東京　鈴木　和子

弾み来る小さき靴音チューリップ
去る家に残す表札花ぐもり
目で追うて蝶々とゆく川辺かな
蝶の昼行きと帰りの径違へ
高階の幟平らに風光る

さいたま　斎藤　みよ

男体山を望む堤の八重桜
永日の袋小路を一輪車
ここは元男爵邸よ松の花
ランドセル背負ひてポーズ花の下
黒猫の居座る空家花あけび

橋本　京子

囀を聞きて目覚むる夜明かな
門前や父母も晴着の入学児
春夕べ蕊ふりしきる散歩道
逃水を追ひゆく児らの声高し
木々渡る風の音にも囀が

塩野　久子

鳥ぐもり予約十時の歯科医院
春服や蔵の町行く人力車
雨上がり轍の中に菫草
東風の音聴きつつ宿の腕枕
パンジーに語りかけたる明るき日

新井　孝麿

おづおづと奏づる笛や八重桜
八重桜百一歳と山の湯に
蕎麦茹だるまでの瞑想八重桜
かたくなさ元より承知桜もち
満ちたるこころ湯船に浮かせ八重桜

さいたま　山口　韶子

裏山の白きは辛夷谷の朝
半ば覚め半ば眠りて花辛夷
美しき若狭塗箸蒸鰈
静けさや昏き湖面を菜種梅雨
風光る近江の湖の大鳥居

若狭　山﨑　郁子

散る花に別れを惜しむ夕散歩
墨堤を歩きに歩き桜餅
行く春や澄みし眼のアスリート
チューリップ抱きしめて知るその重さ
ケーキ焼く匂ひ漂ふ春の昼

越谷　阿部　幸代

雲雀野やトランペットを吹く少女
落椿セカンドライフ輝ける
梅が香や顔を寄すれば違ひあり
たちまちに点と化したる揚雲雀
春の闇初恋の人いまいづこ

さいたま　反町　修

厄祓ひ帰路の参道風光る
春の夜や五年日記を読み返す
菓子を焼く香り豊かに春の昼
江の島が遠見に霞む春の海
閑かなる学舎に満つる緋の躑躅

平塚　丸屋　詠子

刷毛は枝空を萌黄に糸柳
枝振りて穢れ祓はむ川柳
使命を受けし戦士がごとく鳥雲に
下校告ぐ子らの放送鳥雲に
鳥雲に遅れし一羽意地見せよ

吉川　杉浦　理恵

分身の背丈伸びたる日永かな
砂浜の砂山消ゆる日永かな
鳥鳴きてぶらり畦道日永かな
山里の古き名家や八重桜
校庭の元気な笑顔春一日

さいたま　千坂　平通

沢の音や木木の根元を春の水
山稜の空の広さよ鳥曇り
声だけが路地に居残る春の夕
春夕べ亡き友偲ぶ一つ星
山裾が日毎ふくらむ二月尽

秋本カズ子

利用客減りたる駅の桜草
風光りからくり時計正午告ぐ
天をさす少女の像や風光る
遍路杖束ね置かるる満願寺
強飯を余熱で蒸らす昭和の日

さいたま　笹本　啓子

沙羅双樹光に満ちて春の寺
行き場なく桜の谷を踏み迷ふ
海に入る西日を背に帰る道
どこへでもさあ飛んで行け卒業子
人絶えて桜蕊降る遊園地

伊予　向井　章子

碧空へ桜とけゆく海の丘
大空や桜千本吉野山
人住まぬ村にダイヤの春の星
湖岸には桜大樹と花見船
郷の闇解き放ちたる春の星

さいたま　藤岡真知子

春眠や空に清書の筆はこび
春眠やけふも亡き子が夢に出づ
対面やガラス戸越しの雨蛙
リーダーの号令一下鳴く蛙
地虫出づ吾の生き甲斐庭仕事

杉戸　佐々木史女

夕闇に淡き影置くフリージア
百年も同じ姿や紋白蝶
待ちかねし庭にやうやくシクラメン
背広姿少しなじみて竹の秋
先達の声の弾みや鳥交る

さいたま　川村　治

春昼の十字墓より桜島
春昼や欠伸の連鎖夫と妻
「咲きましたよ」と誘ひの電話桜草
クラリネットを土手で練習桜草
雑草に隠れすくすく桜草

竹澤　和子

心酔や人出少なき夜の桜
うすれゆく記憶をもどす桜草
夢を見て電車乗り越す春の昼
植ゑ替への重ねられしや桜草
少少のワインの酔ひや春の昼

小川　洋子

春休み余白の多き学習帳
近づきぬ俥夫の足音竹の秋
山門を一歩踏み入る竹の秋
ニュースより昭和の声よ蓮華草
春の雪手あそび歌の三姉妹

川崎　鈴木　玲子

ふらここや揺らせ飛び出せ一年生　小浜　松島　寛久
山門の蝶は恐れぬ仁王の目
むくむくと土竜若草もち上ぐる
春愁や讃岐の姫の恋一首
ふらここや波に押されて山を蹴る

春愁ひ雲なき空の無限大　若狭　岡本　祥子
ゆらゆらと川面に映る遅桜
蝶飛ぶや舞台の域を越えて行く
ウイルスの恐さを知らぬ紋白蝶
染み染みと穀雨の音の安堵かな

蟻出づやまる描いてゐるはぐれ者　檜鼻ことは
連れ添うて山ふところの藤の花
朝凪や陰の泊りに難破船
龍天に昇るや土の黒き畑
夕桜母の帰りを待つ子かな

石仏に片手拝みの遍路笠　さいたま　森　和子
接待の陽気な婆や遍路道
早立ちのバイク遍路に朝日かな
うす日差し卯の花腐し去りゆくや
卯の花腐しジャム煮る厨香り満つ

地虫出でやつと終はりし地下工事　さいたま　水野　興二
余寒なほ硯に注ぐ水重し
朝桜午前六時の散歩かな
ひたむきな人が好きです梅の花
桜咲き正午を報す大時計

コロナ禍の春戦中の頃と似る　いすみ　平石　睦子
自己流の体操加へ目借時
ジーパンのばりばり乾く日永かな
春夕焼街の目玉の海鼠壁
つちふるや路地に芥の吹き溜り

桜蘂降る砂場にもベンチにも　さいたま　松田　朋子
桜蘂いつぽん夫の肩に降り
桜蘂降る下校児を追ひかけて
母と行く桜蘂降る京の旅
富士仰ぎ親子で茶摘み体験日

八重桜抜け出てみれば天守閣　村杉　清吉
見下ろせば参道隠す八重桜
永き日や工事現場の重機止む
元凶のコロナ退治や花鎮め
永き日や参道清め水を打つ

振り上ぐる筍素手にほつこりと
掘りたての筍加へバーベキュー
休校の教室見守る葱坊主
菩提寺の裏庭狭しと著莪の花
山独活を金平にして夜の膳

蕨　細井　良子

桜散り猿山の檻人の檻
チャリガールの車輪にからむ花の塵
春休み孫に教へるへぼ将棋
桜餅あすは前線どの辺り
水槽の水は澄みをり田螺鳴く

さいたま　飯田　忠男

宍道湖に荒き波立ち蜆船
自転車で巡る明日香や春惜しむ
古利根や角組む葦の浮き沈み
大宰府の主なき家や燕来る
春の風免許五年を無事更新

草加　外村　紀子

精を出す着物リメイク春の昼
ストレッチして気分転換春の午後
春の昼庭片隅に三輪車
春の昼浅草界隈人気なし
春の馬意気揚揚の初制覇

さいたま　野村　美子

「三密」を守りて籠る遅日かな
自治会長の棒読み報知暮遅し
切れ目なき車列見送る遅日かな
ウイルスに負けじと桜色を増す
目印は黄色の家とオキザリス

さいたま　山戸　美子

花冷えや小説本を音読す
ケータイに桜を写し良しとする
老犬と日課の散歩桜散る
満天星の花愛らしく愛らしく
一陣の風にたんぽぽ絮とばす

高原　和子

ゆくりなく地球丸ごと春嵐
憂さ晴らす春の諸花女神ごと
手作りのマスクせし子や入学式
雲もなく桜が山の如く見ゆ
そつと見て帰る虚しさ花ざかり

東京　河原　叔子

シャブリ香るや皿いつぱいのムール貝
大声で歌へど音痴葱坊主
土筆によきによき単線の待避線
プリムラと呼ばれて悲し桜草
高遠に花見の予定立ち消えに

町田　瀬戸雄二郎

春愁や螺子巻いて居りオルゴール
幸せは色に出けりたんぽぽ黄
たんぽぽや早寝のくせは親ゆづり
夫の忌に鈴蘭ひそと顔見せて
春愁や人差し指の傷未だ

さいたま　髙橋　敏子

抱き合うて背を叩き合ふ卒業子
野焼あと無傷のつくし顔だせり
つくしんぼ空行く雲にヤッホッホー
久し振りきやうだい揃ふ彼岸かな
春雷や熟女ばかりの誕生会

栃木　佐々木典子

ときをりの落花目薬さし損じ
春の暮ミルクも汁もとろみ付き
蓬髪の面会謝絶日の永し
栗鼠いそぐ若葉の小枝噛みとりて
泳ぎ疲れて妙な夢みる薄暑の夜

横浜　山岸　弘子

姫浅蜊ひと含みそつと含みけり
一年生園児の気持抜けきれず
風孕み馳け出す子等の卯月かな
ふらここや手招きされて蒼空へ
ぶらんこやひと漕ぎ高くまた高く

さいたま　福田　育子

外人の日本語桜さくらサクラ
仙台より抱へ来し藤これ見よや
虎杖食ぶまさかの時を教へたり
雪の富士眺め杖つく事忘れ
五十段のぼれば我が家春の風

横浜　川島　典虎

速やかに古巣繕ふつばくらめ
囀や微かな揺れを枝の先
夜蛙に馴れて家人は眠り込む
砂抜きの浅蜊がきゆつと呼ぶ厨
東風吹くや回転ドアに抗はず

さいたま　岡田　宣子

若葉雨校門前の水溜り
梢より欅若葉の陽の光
蝶生まる酸いも甘いも浮世風
初蝶の白蒼天に美しく
白蝶や生徒不在の庭広し

東京　柳父　はる

蝶々の吹き戻さるる赤信号
蝶々を夢中で追へば墓地に消ゆ
蝶を追ひ歩数の伸ぶる夕間暮れ
芝生這ふ稚誘ふごと蜆蝶
収穫のキャベツ畑に残る蝶

水落　守伊

白蝶は黄花好みか群がりて
空青し黄蝶乱舞の牧の原
チューリップの咲きし園庭児ら笑まふ
アネモネの花束うれし記念日に
いづこより香りつつましフリージア

さいたま　臼田　みち

コロナウイルス地球を被ふ余寒なほ
さしあたり予定まつ白嫁菜飯
駆くる緊急事態宣言春の雪
覚えなき感染恐し春嵐
猫の子や不要不急の引きこもり

田中　泰子

春の星話し掛くれば首を振る
春の雨魔物はどこに住むのやら
神に祈るコロナ撲滅春の風
囀に引き込まれ行く森の中
囀や老犬散歩のんびりと

和歌山　南條きわゑ

春の雪九死に一生得て退院
チューリップ子の愛情にふと気づく
地元産春野菜みな柔らかし
パンデミック思ひもよらぬ暗き春
疫病を機に世界の平和想ふ春

宮　代　関谷多美子

春の鵙コロナ騒ぎで気配消す
手作りのマスクは浴衣の残り布
菜種梅雨ついつい腰に手がのびる
蒲公英をよけてよろける婆一人
友呼んで土筆づくしでもてなせり

藤　沢　小島喜代子

愚かさを刻む慰霊碑花の雨
焼き立てのパンを抱きゆく花の下
仄暗き路地の行く手に花吹雪
花冷えの橋を渡るにフォービート

東　京　山中いちい

口惜しき臨時休校桜咲く
強風に白蛇の如し雪柳
川下へ余韻つたふる花筏
公園の花の祭典風光る

さいたま　武田　重子

分校に教師ひとりや濃山吹
鳥雲に完成近き聖火台
道草の子らを見送る濃山吹
山吹や獣道抜け秘湯へと

東　京　飯室　夏江

陸と水繋がりあひて蝌蚪の紐
亀の子や道草をする通学路
友に会ひ会話はづみて蛤つゆを
虚子の忌にスーパームーン昇りけり

さいたま　小駒さち子

コロナの禍子猫寝転ぶ散歩道
家に籠るどこかとほくで猫の恋
梢揺れケキョケキョケキョと匂鳥
春の昼止まつたままの飛行塔

木村るみ子

遍路道疲れた頃に振舞茶
四回に分けて満願遍路杖
遍路笠八年越しの霊山寺
震撼とさせしコロナや遍路道

長井喜代子

風光る駅弁かかへローカル線
川滑る水切り石に風光る
花嫁の打掛けのごと雪柳
米をとぐ母の鼻歌水温む

湯浅　和

春の野や遥か越後の山白し
春雷や慈雨待ちあぐむ山の木々
一人静に惹かれ訪ふ吉野山
遠まはりして漫ろ歩きや花の道

春日部　仲田　利子

若者にも自粛の桜隠しかな
人類の絶滅ありや金鳳華
春の月人気タレント急逝す
車窓よりスーパームーンと花見かな

和歌山　髙橋満耶子

リーゼントの匂ひ鼻つく卒業式
万歩成り笑みのこぼるる春の道
今春野美し高菜のにぎりめし
誰ぞ待つ湖畔に一人静咲く

さいたま　安倍　弘夫

風光る太極拳の指の先
ファンファーレ受けて疾走風光る
金婚の二人の笑顔風光る
春夕焼わが人生に余白あり

鈴木　藻好

「ただいまあ」と一年生の顔になり
字をなぞるだけの宿題一年生
花吹雪兄につきゆくランドセル
黙黙とラーメン食らふ四月寒む

和歌山　葛城千世子

野の花を抱へし子等の花御堂
紫陽花の色きはまりて全快日
若鮎の遡上射す陽をはねかへす

さいたま　篠﨑　紀子

卒園式先生冥利の絆かな
一人静花穂気高き白拍子
薬草園に草引く農夫春の風
素足もて駆けし日もあり春の野辺

春日部　諏訪サヨ子

爺縮み子ら伸び伸びと春炬燵
夫と行くあと幾度の花堤
道問はれ答ふる吾も花の下
休校の雲梯に散る桜蘂

さいたま　本橋　幾子

覚悟召せ女敵討の春の猫
引鶴の眼に湖の反射光
夕蛙チェロ組曲に飛び入りぬ
鯉ぬたり背で押し切る花筏

横山　礼子

こんなにも小さきたんぽぽ空見上げ
川縁に愁ひ枝垂れて花の散る
花筏ゆるり流れてまた離れ
全天を覆ふがごとく桜満つ

菅原　真理

人間の業試さるる竹の秋
パンジーの黄色まぶしきシャッター街
医院より回り道していぬふぐり
菜の花揺れはまさしく風見鶏

東　京　畑宮　栄子

黄に染まる土手に合ふ歌春の昼
からくり時計のディズニーの曲春の昼
咲き満ちて古民家覆ふ桜かな
しきりなる花吹雪見て部屋ごもり

さいたま　森下美智枝

幼子の頬を撫ぜゆく花吹雪
節くれの指あやつりて若布干す
再会は桜の下と指切りす
退院の夫のハミング春の風

和歌山　嶋田　洋子

黒板に人気マンガや若葉風
若柳の橋をくぐりて屋形船
柿若葉足裏揃ひし修行僧
巡行の貴船神社や柿若葉

さいたま　山下ユリ子

濠めぐるお客ひとりの花見船
走り根に咲きたる花の二輪かな
連日のコロナ報道花の雨
春愁やつと会ひたきは父と母

和歌山　宮井美恵子

太陽の奥へパラソル広げたり
マリッジブルーの空に二重の虹生まる
向日葵の丘にまぎれてワンピース
大皿に朝の手抜きの夏料理

所　沢　関根　千恵

板干しの紙に揚羽の影縺る　小川　藤間　友二
町議会多勢に無勢芋嵐
生まれつき無知蒙昧や木瓜の花

折り紙に想ひ出づくり遍路宿　さいたま　落合　和枝
熊野古道歩き歩きて遍路笠
池の面明かし卯の花腐しかな

山吹を先祖の墓に手向けたり　緒方みき子
目を瞠り山吹の名を問ふをさな
道中の無事を祈らむ鳥雲に

小袋の賽銭重し遍路杖　田中　タイ
民宿の垣根明るく卯の花腐し
卯の花腐し膝の疼きを軽く揉む

早春の淡空眠気つれてくる　佐藤　克之
啓蟄や四方の生き物大欠伸
空の青青に映えたる花海棠

春愁やすることもなく髪を切る　樋口　元美
バス待つや乗客は無く四月の蚊
あたたかし薄着の犬の散歩かな

（六月号分）

大太法師（だいだらぼっち）が春の服着て来たりけり　さいたま　飯田　忠男
花粉・コロナをものともせずに春の服
片恋は棘の痛さよ花山椒
惜別やギロチンのごと八重椿

「水明」の投句について

八月、九月号は合併号になりますので投句は次のようになります。

水明集の方

七月二五日締切（七月号に添付）夏季競詠
八月二五日締切（六月号に添付）水明集投句
九月二五日締切（合併号に添付）水明集投句

季音の方（雪・月・花）

七月二五日締切（七月号に添付）夏季競詠
〃　通常の投句
九月二五日締切　通常の投句

作品評

山本　鬼之介

囀や親子で探す森の精　　新　暦文

森の精は森の妖精のことで、西洋の伝説や物語・童話に登場し、森の中の草や樹、石や岩、水などの自然物に宿る精霊を指していると思う。絵画やイラストで見る限りでは、少女やうら若い女性の姿をしており、薄衣を纏い、背に優美な羽根を付けている。見るからにうっとりと見惚れてしまうような姿態で、グリム童話の「白雪姫」や、アンデルセン童話の「親指姫」などから妖精＝ニンフのイメージが伝わってくる。

親子で森を探索して、蝶や兜虫などの昆虫採集をしたり、茸狩りをしたりして楽しむことはよくあることだが、森の精を探すという行為は、夢があってたいへん素晴らしい。妖精の存在を九分通り否定しつつも、若しかしたら現れるのではと思っている親と子のロマン溢れる心根に惹かれるし、作者の柔軟な発想に賛辞を贈りたくなる一句である。

茶はこびの人形止まる春の昼　　西幅　公子

茶運び人形は、江戸時代に制作された絡繰り人形で、現代でも完成品や、説明書を読んで自分で作るセット品が販売されている。

茶を入れた茶碗を、人形が持つ茶托に載せると、人形が客の居る処まで運び、客が茶を飲んで空になった茶碗を茶托に戻すと、人形が踵を返して元の場所まで運ぶ、という仕掛けになっている。子供の人形の可愛らしい風貌と精巧な動きに魅了される。ロボットやＡＩＴが幅を利かせている現今において、この人形は一服の清涼剤である。季語の「春の昼」が、この絡繰り人形に心を通わせている。

百年の校舎を隠す桜かな　　野田　静香

創立百周年を迎える学校はそうざらにあるものではなく、大正時代から令和の世までの四代に亘る近代日本の歴史の痕跡を諸処に留めていることであろう。恰も校舎を包み込むような桜大樹も、百年という年月の中で重要な役割を担っている。老骨に鞭打って、毎年見事な花を咲かせ、生徒や教師をはじめとして学校関係者の皆を楽しませる桜の古木である。

下町の人情じんと春の暮　　渋谷きいち

江戸時代から昭和の時代まで連綿と受け継がれてきた下町の景観も今では薄れ、核家族化が進んだ現在では、時には煩

わしさを感じるほどの下町人情も、次第に昔語りになりつつあるのかと思う。しかし、久し振りに東京の下町を探訪した作者の心が、じんと震える出来事があったのだろう。商店街の惣菜屋のおばさんか、魚屋のたいしょうか、縄暖簾の居酒屋のおやじか、発する言葉は荒っぽいが、心に沁みる土産を得た春の夕さりであった。

永き日や夕餉の匂風呂の音　　日髙　徹

自宅の中でのことか、或いは、帰宅途中で通りかかった他家の様子を詠んだものか。筆者としては、後者の意であることを前提にこの句を選んだ。厨房の換気扇から吐き出されてくる料理の匂と風呂場の床に当たった桶の音。季節感と時刻を表すのにぴったりの雰囲気である。この家の夕食の菜は何か、今風呂に居るのは誰かなど、たわい無いことを考えながら我が家へ向かうのだが、今度は自家のことが気になりだした。夏至が近い日の夕刻の一齣である。

雨を聞く一人静の裏鬼門　　曲淵　徹雄

「雨を聞く」を「雨音を聞く」と言い換えれば、一人静が咲いている裏鬼門即ち南西に位置する場所で、誰かが所在無さげに雨音を聞いていることになるだろう。深く詮索する必要は無いが、何となく気になる情景である。陰陽道で最も忌み嫌う北東方の鬼門の反対の場所だけに、尋常ならざるものを感じる。その花の清楚な姿と名前とは正反対のイメージを持つ裏鬼門が、読者に語りかけてくる。

窯元の破顔の朝や山桜　　青木　鶴城

この俳句から、かなり名の知れた陶芸家を想像する。観光地での楽焼しか経験したことのない筆者が、雑学を駆使して言わせてもらうと、プライドが高く、気難しい陶芸作家が、ひと窯ひと窯に心血を注いで作業したとしても、心底納得できる作品が生まれる機会は少ないと思う。

苦労が実って、久々に会心の作品が出来上がった。徹夜仕事で疲労こんぱいの顔が輝いた。「破顔の朝」が、その瞬間をつぶさに活写している。工房を包み込むような山桜の古木が、何時も窯元を見守っている。

逆上がりできぬ子らにも木の芽風　　保坂　翔太

筆者の小学生・中学生の頃の想い出をひもとくと、勉強のできる子と運動が得意な子とに大別されていたようなきがする。文武両道のいわゆる勉強と運動を両立させていた子は居なかったように思う。現代の子供達はどうだろう。本句を、映像化すると、びゅんびゅん逆上がりを連発している子供らの脇で、苦手な子らがしょんぼりしている。それでも、木の

芽を渡る風は、両者を分け隔て無く優しく撫でてゆく。

時わかずまはる水車や濃山吹　原田　秀子

出だしの言葉「時わかず」が素晴らしい。水の流れに身を任せ、時を定めず回り続ける水車に、当たり前と思いながらも、一抹の哀れみを感じてしまう。信州安曇野の「大王わさび農場」の水車と掲句の水車が重なる。本尊の両脇に安置されている脇侍のように、水車に寄り添う濃山吹が、水車の孤独感を解きほぐしている。

新居へと向かふ荷物や鳥雲に　越田　栄子

賃貸のマンションから待望の戸建ての持ち家へ向かう引越し荷物を積んだトラックの後ろを、家族が乗った自家用車がついて行く。車窓から空へ眼を移すと、折しも北方の大陸を目指して一群の鳥が帰って行く。これから始まる新居での生活を夢見ながら、鳥たちの旅の無事を祈るあたたかな一家の姿が読み取れる。

春の野に広ぐる画帳旅枕　染谷　正信

辞書を引くと、画帳＝絵をかくための帳面と、まことに素っ気ない説明が為されている。仕方なく筆者の想像を膨らませて解釈すると、おそらく結婚式や祝賀会などで来会者が記帳する和綴じの芳名帳のような体裁ものではないかと思う。慾を言えば画帳の主は、矢立から小筆を取り出し、おもむろに、身近にある草花や、周りの景色を写生する宗匠風の人物であってほしい。下五の「旅枕」から察するに、作者は、気の向くまま足の向くまま各所を巡り歩く旅絵師に自己を投影しているように思えてくる。かつての山下清画伯のように。

童女笑む牡丹桜を簪に　加藤でん治

牡丹桜は八重桜の別称である。少し長めに切り揃えた黒髪の三歳から五歳くらいの女児を思い浮かべるが、八重桜のついた小枝を髪に挿してもらってちょっと恥ずかしそうに笑みを浮かべる童女である。実に日本的で、その雰囲気をしっかりと描き出しているのが、その真髄「牡丹桜」である。

春愁の樹々のことばを運ぶ風　神田　治江

なかなか扱いにくい季語の一つである「春愁」を、直接人ではなく、樹という自然界の物体をもって表していることに注目した。樹木には多くの種類があり、幹・枝・葉のそれぞれにも違いがあるから、風によって発する音も違ってくる。「樹々」の発する音は樹々の声であり、それを「ことば」としたことに妙味がある。また、樹々を「人々」に置き換えれば、春愁との関係が明確になるし、奥行と深みのある俳句と

して鑑賞することができる。作者自身は気付いていないかと思うが、着実に俳句の技量が上がった証の俳句である。

洗濯をするだけの日や柿若葉　　石川　理恵

陽射しを受けた柿若葉が、きらきらと輝くまさに洗濯日和と言える一日。溜まっていた冬着や春先の衣服を一気に洗濯する。昼食をはさんで、黙々と洗濯に精を出す主婦の姿が、正直に表されていて好感が持てる俳句である。

春の野の息吹ありあり蝦夷地にも　　横山　君夫

春の息吹を、作者がしっかりと受け止めている。ラ変動詞の「あり」を重ねた「ありあり」と、「蝦夷地にも」が、この俳句を盤石なものにしている。

丹精の押し花添へて花便り　　太田　絹映

花便りを受け取ったのか、それとも、送ったのか。筆者は前者の句意としてこの俳句を味わってみた。見るからに花びらの一枚一枚が乱れることなく押されていて、贈り主の人柄が伝わってくるような見事な押し花なのだと思う。押し花と同様に、手紙の文字にも文面にも相手の真心が注入されており、味わい深く読み取った。手紙の主が雪深い北国に住む人であれば、桜前線の北上を身近に感じ取ることができる。

春愁や紅ひきをへて鏡伏す　　梅澤　輝翠

ストレートに春愁を詠んでいる。女性にとっての化粧は、自分の心を引き立てる手段でもあり、最終工程とも言える唇の紅ひきの結果が大事なのではと思う。手鏡に映した口元にルージュをはこび慎重にさす。「鏡伏す」からその出来映えと満足感が読み取れる。

パステルを以て描きたき春の星　　鈴木　和子

潤を帯びた春の星を眺めていて、この感じを如何に描き表すかを考えたとき、パステルという答が出たのである。この絵の具の原料や製法、そして、使い方までをも識ると、作者の思いが理解できてくる。筆者は用いた経験が無いが、一言でいえば、「柔らかなタッチ」ということになろうか。いろいろのパステル画を観ると、それぞれに特徴があり、描き手の気持を自在に表現できる絵具なのだと思う。この句から、作者の絵心が伝わってきた。

天をさす少女の像や風光る　　笹本　啓子

この少女像は、公園や駅前広場などで見掛ける石像か金属製の彫像であろう。天を指しているその形は、若人たちの未来への希望の象徴であるかのように受け取れる。

水琴窟

（水明集五月号鑑賞）

池田　雅夫

不揃ひの園児の背丈春早し　　梅澤　輝翠

入学式の児の背丈がばらばらな光景を思い浮かべる。児の発達に個人差があるためでしょう。背の高い児、小柄な児が一緒になって早春の日射しの中で、活発に動き回る景が見えます。その児等もやがて一年生へと成長してゆきます。

ゴム印の弾力わづか寒明くる　　森　和子

重苦しい寒の時期が終わり、ようやく春になったことを悦び期待が膨らみます。寒が明けたといっても寒い日がくることも必定です。そんな半信半疑な心情を「ゴム印の弾力」と具体的に表現しています。その発想力に驚きです。

風花を帽子で受けし児の笑顔　　佐々木典子

風花は不思議な現象です。晴天なのにどこからともなく舞う雪に思わず手を翳してしまいます。帽子を差し伸べて受けている様子を実際に目にしたのでしょう。雪の、数少ない明るいイメージを抱かせる「風花」を「児の笑顔」と詠んだ。

早春や病窓からの空無限　　竹澤　和子

「早春」という言葉には、いよいよ春になったという期待が込められている。「病窓からの空無限」から、快方に向かっている嬉しさが汲み取れる。退院の日も近いのであろう。

貝売りのこぼしてゆきし春の水　　瀬戸雄二郎

「あさりー　しじみー」などの売り声で町内を回ってきた貝売も今はほとんど見られない。貝を桶に入れ、水に浸して運ぶのでしばしば水がこぼれる。それを「春の水」として主役に据えたのだ。多方面からの観察力、視点に感服した。

春の土子牛は尻尾振りにけり　　檜鼻ことは

「子牛が尻尾を振りました」としか言っていないが、それが「春の土」に重なることで、のどかな牧場の景が浮かんでくる。草木をはぐくむ「春の土」に、草をたくさん喰んで成長してゆく「子牛」の生命を託しているのだろう。

梅ほつほつ午後から久しぶりの雨　　河原　叔子

「ほつほつ」が、ほころぶ梅を表わしていると同時に、雨にもかかり、ほつほつ降りだしたと詠んでいる。春の雨の艶やかさ、こまやかさが暖かな印象を与えている。春の日の午後の落ちついた雰囲気を醸しだしている句に共感する。

高々とたいまつ掲げ野火を追ふ　山下ユリ子

主に害虫駆除を目的として野の枯草を焼くのである。その灰は肥料になるという。広い野では所々燃え残ることがあるので、それを「たいまつ」で燃やし尽しているのだ。関東では渡良瀬遊水地の野焼きが有名で風物詩になっている。

曲の間のホールに響く咳一つ　湯浅　和

交響曲の楽章の間であろうか。息を凝らして聴いていた曲の一くぎりついたことで、ホッと力を抜いた。緊張の解けた騒めきの中、咳払いをしたのだ。新型コロナウイルスの影響でコンサートは当面、開催されていない。

ほめ上手の恩師の背や梅ふふむ　嶋田　洋子

「梅ふふむ」は、梅がつぼんでいて未だ咲いていない状態のこと。個性を生かし的確な指導法として、褒めて才能を引きだすのである。が、それなりの苦労もあるはず。「恩師の背」には、それに対する感謝の念が込められている。

散髪を一日延ばし寒明くる　長井喜代子

厳しい寒の日が続いたのであろう。のびた髪を気にしつつも剪りあぐんでいる。髪が短くなると襟元に直接寒さを感じることがある。そうこうする間に寒が明けてしまった。

沿線の菜の花揺らす黄の電車　岡田　宣子

「菜の花」と「電車」で思い浮かべるのが、上総いすみ鉄道。「菜の花電車」とも呼ばれ親しまれている。黄色に塗られた車体が通り過ぎるたびに沿線の菜の花が靡くのである。車窓からも、その揺れる姿を見ることができる。

立春の雨戸全開風青し　緒方みき子

「立春」は暦の上での春で、気温はまだ低く実感がわかないが、それでも「春立つ」の言葉に敏感に反応してしまう。「今日から春だ」と、雨戸を全開にして外の空気を入れているのだ。「風青し」の措辞に新鮮なひびきがある。

地下道に革靴の音冴返る　鈴木　藻好

トンネルや地下道などでは回りの壁に声や音が反響することがある。夜などの人通りの少ない地下道は静まり返っていて、靴音が大きくひびく。それが自身の靴音であっても不気味に思えたのだろう。その心持ちが「冴返る」に現われる。

冬菫の妖艶な色ふりむかせ　田中　タイ

鉢植えであろうか。冬菫の艶やかな色に惹かれて思わずふりむいたのであろう。「ふりむかせ」を「日暮坂」のように場所や時間を示すことで情景がより具体的になる。

『雪嶺』 4・5・6月号

美唄の句碑について

令和元年十一月二十七日の美唄通信「プレス空知」及び令和元年十二月三日「読売新聞」に、雪嶺俳句会特別顧問で美唄かげろう俳句会主宰の**岡田春水氏**が、美唄市役所前庭にある、長谷川零余子・かな女夫婦句碑と正岡陽炎女の句碑の維持費補修費として、**美唄市文化基金に、百万円を寄付。感謝状が贈られた事**が、掲載、紹介されました。

零余子は俳句結社「枯野」「ぬかご」主宰。零余子亡きあと、それを経て妻のかな女が継承「水明」主宰となった。雪嶺の師系に当る。

陽炎女は美唄水明会の支部長で、雪嶺創刊主宰の横道秀川とは親交があった。

句碑は最初、昭和二十六年に零余子・かな女夫婦句碑、三十三年に陽炎女句碑が空知神社境内に建立されたもので、その除幕式には札幌から横道秀川や多くの水明同人も参列した。六十年に市役所前庭に移設されたが、建立から六十八年が経過して、句碑が傷み碑文の文字も擦れ、説明の案内板も壊れてなくなっており、「道内外の俳人などが吟行に訪れた際、句碑を見て貰える様に整備して美唄文化として残して欲しい」との春水氏の願いからである。

（敬称略）

雪を見ねば蝦夷ものたらず秋の蝶
長谷川　零余子

花蕗をわけて石狩川となれり
長谷川　かな女

農婦野に座せば陽炎髪なぶる
正　岡　陽炎女

《編集部》

美唄にある長谷川零余子・かな女夫婦句碑と
正岡陽炎女の句碑の前で、岡田春水氏

師弟句碑

岡田春水

秋日澄む補修決まりし　師弟句碑

世を思う雲間の月に　すすきゆれ

たいぼくのとんぼ返りや　出水川

風となり水となる身に　秋澄めり

糸とんぼ　尾を上げて逝く冬の窓

帰らざる　海のなみまの野分かな

小走りの　傘を追い越すあられ哉

捨てきったこの世の義理や鷹一つ

自句の背景

・市役所前庭に建てられてある

雪を見ねば蝦夷ものたらず秋の蝶
長谷川零余子

花蕗をわけて石狩川となれり
長谷川かな女

農婦野に座せば陽炎髪なぶる
正岡　陽炎女

の句碑が六八年の風雪から傷み、説明書きも無くなっていた。かな女と陽炎女に師事した私は、このままでは、ただの石になってしまう！道内では美唄にしかないとの思いから補修費を寄付した。思いを受け坂東市長は礼を言い、握手をして「来春の雪解け後、整備をします」と言われた。これは雪の降る中、とろろ、卵丼を持って見舞いに来られた陽炎女師と、肺切後、窓からの若葉の匂い、小鳥の声に「ああ生きていて良かったなあ」と思わされた、励ましのお手紙を下さったかな女師への感謝と思慕からである！

鼓笛集

山中 順子 選

帰れぬと子よりの電話豆ごはん
豆飯に卓袱台囲む丸い顔
豆ごはん三膳食べた日も在りし

瀬戸雄二郎

開山道辛苦秘めたる落し文
紅花の紅は巫女めく卑弥呼めく
初夏の風情豊かな澄生の詩

諏訪サヨ子

揺るぎ無き最初の一手青あらし
鎌倉を襲ふがごとく雲の峰
夕立の初めはぽつりぽつりから

渋谷きいち

休館延長の回覧板くる立夏の日
風薫る叔母幸と日日おくる
種まきて八十八夜に雨を待つ

榊原　聰子

朝市の姉さん被り夏めける
羽抜鶏ひとも見映えが大事かな
蜜豆やひとに教へぬ転居先

染谷　正信

若葉風塞ぐ心のカンフルに
青田道下校の子らの傘遊ぶ
春昼やじわつと滲むティーバッグ

菅原　真理

小判草音するかもと触れてみる
十薬の十文字白き夕の庭
野茨のやさしき色に母想ふ

佐々木典子

仙台へ同窓会や夏はじめ
仙台の駅に恩師を迎へ初夏
仙人掌の花の開くを見つむ夜

高原　和子

若葉風馬場に光りし砂の粒
若葉風足湯に並ぶ膝頭
若葉風疫病除けの御札受く

笹本　啓子

コロナ来て子ら来ぬ母の日でありし
夏マスク忘れ罪人ごこちせり
夏座布団あり縁側のなき住居

寺内　洋子

サルビアや酸素の薄きラサの町
人いきれダライラマ廟玉の汗
炎天下ひたすら歩く巡礼者

田中　泰子

通天閣はみどりの色に半夏生
半夏生長いトンネル抜けんとす
半夏生ジェルクッションに身を任す

高橋満耶子

風薫る笑ひの絶えぬ老二人
武者人形をさむ山鳩鳴く夕べ
緑蔭やコロナは地球駆け巡る

関谷多美子

生垣の新緑径へ膨らみて
風薫る丘に詩吟の太き声
紫に溶けし甘き香鉄線花

鈴木　玲子

半纏の江戸文字ゆがむ神輿振り
江戸つ子の祭半纏ひるがへる
御旅所へいよよ縺るる汚れ足袋

下川　光子

軽ろやかな風胸もとに衣更ふ
幹の丈九メートルに桐の花
風薫るましろき花の沙羅双樹

鈴木　和子

夏めきて流れの早くなる疏水
草笛や土手に寝転びあかね雲
夏草を吹き行く風の香りかな

塩野　久子

有り余る時は泡沫夏は来ぬ
球児らの滂沱の涙麦の秋
梅仕事自粛の憂さを晴らすらむ

長井喜代子

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）　近藤　徹平

行く末は極楽浄土飛花落花

私の母は、年長の私が七歳の時極寒の満州で発病し治療のため、父を残し母子四人で内地へ引き上げた。病状が好転しない中の昭和二十年、ソ連軍の侵攻により父の音信は途絶えた。子供の将来を考えて心休まる日はなかった筈だ。終戦の翌年父が帰還すると間もなく旅立った。心休まらない一生だったが、今は極楽浄土で私を見守っていると信じる。

鼓笛集作品評

山中　順子

帰れぬと子よりの電話豆ごはん
豆飯に卓袱台囲む丸い顔
豆ごはん三膳食べた日も在りし

瀬戸雄二郎

この作者は以前一緒に俳句の仲間だった方のお兄様と拝察すればもういいお歳かと思う。そうするとこの三句は昔を思い出して、現在に生きている句だと思う。真青な豆ごはんを作っていたら帰れない。でも丸い顔して三膳も食べた日もあった。親子なのか兄弟なのか。楽しく興味が尽きない。卓袱台、三膳は今は何杯であろう。

紅花の紅は巫女めく卑弥呼めく

諏訪サヨ子

紅花の色を比喩するとこういう句になるのか。抒情として滲み説得力がある。

俳句四季大賞
新人賞／特別賞
結果発表
全国俳句大会
最終結果発表

◆俳句と短歌の10作競詠
鴇田智哉
斉藤斎藤

◆巻頭三句
正木ゆう子
森田純一郎
小河洋二
大竹多可志
菅野孝夫
江崎紀和子

◆LEGEND～大野林火
「百鳥」北川玉樹

◆その時、俳句手帳
岸原清行

◆好評連載
南伸坊
猫の俳句
筑紫磐井
俳壇観測
坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人
句の手触り、俳人の響き
大西朋
俳句へのまなざし
神作研一
手のひらの江戸
――古典籍を旅する
藤村公洋
俳句のつまみ
酒井佐忠
本の窓辺
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季
Haiku Shiki
2020年7月号
6月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/
東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2020年7月号

特集 波多野爽波
◎波多野爽波百句 抄出・岸本尚毅
◎爽波との思い出
深見けん二 辻 桃子 岸本尚毅
◎論考 原田 暹 小川春休
中岡毅雄 青木亮人
◎一句鑑賞
草深昌子 山口昭男 森賀まり
岩田由美 阪西敦子 抜井諒一

特別作品30句 小檜山繁子

〈グラビア〉俳句界NOW 坪内稔典

特集 この夏、自選力をつける！
◎「自選」とは何か 対馬康子
今瀬剛一 高橋将夫 鈴木しげを
和田華凜 渡辺誠一郎 高田正子
山崎十生 奥名春江 秋尾 敏 ほか

※セレクション結社「湾」和田洋文

私の一冊 介弘紀子「さわらび」

特集「〝甘口〟対談を振り返る」
佐高 信（評論家）

別冊 投稿俳句界 一流選者15名！日本一充実の投句欄

※一部変史の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

特集 文学のことば、日常のことば
～堀本裕樹×東 直子×町田 康 鼎談

◎巻頭作品10句
柏原眠雨・岸原清行・佐々木建成
佐藤文香・鈴木節子・仲 寒蟬
中西夕紀・陽 美保子

俳壇 7月号
6月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
今井 聖

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅱ期］…宮坂静生・柴田多鶴子

新連載
思想としての虚子 …… 中村雅樹
続々・日本の樹木十二選 …… 広渡敬雄

連載
わが俳句道・わが金言（モットー） …… 池田澄子
先人のことば …… 松尾隆信
俳壇史エピソード …… 坂口昌弘
季語への供物 …… 奥坂まや
俳壇時評 …… 堀田季何／俳壇月評 …… 山田真砂年
俳句と随想12か月 野中亮介・武藤紀子

本阿弥書店 〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

句集喝采

近藤　徹平

◆山崎十生「銀幕」

東京四季出版

著者略歴　昭和二十二年大宮市生。昭和三十八年「紫」主宰関口比良男に師事。平成十一年「紫」主宰。第一句集「上映中」、「銀幕」は第十一句集、その他に番外句集多数。現代俳句協会理事、埼玉県現代俳句協会会長、他多数。

著者は「あとがき」で、句会は九割を席題、その内毎月十七句を「紫」に掲載。「銀幕」は最近七年間より抄出した由。

メンデルスゾーンが夜を長くする
ゼロこそは肝腎要草の絮
纏足の燁こぼすこともなく

著者の句材の幅は驚くほど広い。第一句のメンデルスゾーンは「真夏の夜の夢」の作曲家としても有名。第二句、コンピューターは全て一とゼロで構成されている実態から納得した。第三句の纏足（てんそく）を筆者は幼少時旧満州で見た。施術された童女の泣き声を思い出した。既に死語の筈である。

陽炎を秘戯を極めてゐたるかな
陽炎を紡ぎ太平洋となす
陽炎に開式の儀を預けたり

難解な句に難渋した。俳句は取合せ・二物衝撃を妙とするが、その結果起こる文学的興奮を期待するからだと思う。筆者に難解なのは、第一句の秘戯、第二句の太平洋、第三句の開式の儀に浅学の故か興奮出来ないのである。今後は印象派風に限らず抽象画風にも興味を持たねばと思っている。

◆長野保代「世の端に」

東京四季出版

著者略歴　昭和九年東京都生。平成十六年「波」倉橋主宰に師事。二十一年「波」同人。二十二年「波」新人賞。二十六年多摩地区現代俳句協会に入会。二十八年「波」山田貴代主宰に師事。

著者は「あとがき」で、小学校の恩師宅で紹介された知人の縁で俳句を始めたが、今般夫や子供達の勧めもあって家族揃って元気な内にと句集の上木を決断したとのことである。

世の端に生きる二人の夏帽子
若竹や主張貫く子と育ち
父と子の話題ふくらむ生ビール
共に老い今幸せの七日粥
終章も夫と生きたし日記買う

第一句は句集の表題句で控えめな御夫婦の人生哲学を象徴する。第二句は句集冒頭を飾る句で、子育て期の我が子を見守る母親の眼差し、第三句は社会人の息子と夫君の日常を見詰める妻の心情を表す。第四句、第五句は共に老いてゆく中で夫君と二人暮しの幸せを味わっている夫婦愛の句である。

薬師寺へ畦は近道曼珠沙華
礼文島どの道行くも花野かな

著者は俳句を友に日本各地を旅して、その画像を俳句に残している。第一句は奈良県の法相宗大本山薬師寺、近道まで教えてくれる。第二句は北海道北端の日本海上の離島礼文島。御一家の弥栄を心から祈って止まない次第である。

水明夏行のご案内

コロナ感染防止のため各種行動の自粛が求められる状況ではありますが、恒例の水明夏行を２日に日程を短縮し下記のとおり実施します。

会員各位、自らの健康状態と途中の交通事情等十分に考慮の上ご参加ください。

【日　時】　令和２年７月 29 日㈬ と 31 日㈮
午後１時～５時

【会　場】　JR 浦和駅東口「浦和パルコ」10 階
浦和コミュニティーセンター第 13 集会室

【参加費】　２日を通じて 2,000 円
（１日参加の場合は 1,000 円）

研 修 部

りんどう忌のご案内

【日　　時】　令和２年９月 26 日㈯ 午前 10 時受付 午後１時開会

【会　　場】　市民会館うらわ５階　会議室

【投　　句】　２句　兼題：りんどう忌・かな女忌および鰯雲

【投句締切】　午前 11 時

【会　　費】　1,200 円（昼食付、お茶はなし）

【申し込み】　９月 11 日㈮までに発行所総務部へ　38 名定員

※会場はコロナ対応のため申込み無しの方の入場は出来ません。

◎今年喜寿（77 歳・令和２年１月～ 12 月 31 日）を迎えられる方でりんどう忌参加者に記念品を贈呈します。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木　和子　報

朝虹や父ちゃんが振る大漁旗　山中順子
大空へ小鳥を放つ新樹かな　幾子
胸中にバッハのソナタ新樹光　節代
投函し身の浮くやうな新樹の夜　和葉
ポプラ新樹少年大志いだくべし　延昭
花水木父の画帖にある余白　由紀子
初夏の風藍職人の藍の衣　大場順子
天と地をむすぶ勢ひの新樹かな　治子

――以上特選

子の手取りバージンロード春日燦　徹平
新樹かげ湯島聖堂ひつそりと　マスミ
絵画めく硝子戸越しの新樹かな　幾子
晩春や目薬一滴したたらす　岡野順子
アーカイブの扉を開く新樹なか　節代
ベランダのコップの水に新樹光　光弥
人混みは元より嫌ひ座禅草　喜恵
新樹揺れもしや鴉か近寄らず　和葉
島が守る礼拝堂や新樹光　延昭
模様替して窓ひろびろと新樹光　理恵
命名の墨痕に降る新樹光　由紀子
細腰の夢二の女夏の風　大場順子
ひとしきり新樹の下の立ち話　チアキ
手をつなぎ走る親子に夜の新樹　治子
閉館の宿を見守る新樹光　はるみ
まづ風を朝の新樹は目のくすり　山中順子
見ゆるもの揺れて新樹の風透明　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田　絹映　報

若葉風湧水砂を踊らせて　昌弘
母の日の贈りものですナンプレ集　鶴城
ひめぢよをん昔の歌を唱おうよ　竺仙
青芝になげだす足裏生気みつ　玲子
母の日のほのかな悔いと贈り物　みどり
背を正しいただく御薄若楓　絹映

――以上特選

若葉風甍は深き海の色　昌弘
不意打ちは山の歓迎若葉雨　鶴城
若葉時今日はパソコンオフにして　峰雄
母の日や孫も娘も吾も母　禮子
蒲公英の早く綿毛になりたくて　竺仙
母の日や花びら落つる音を聴く　淑江
若葉風婚約の儀の整へり　稔
コロナでも青葉に癒やされ散歩かな　寿恵
母の日や母恋ふ思ひ終りなく　玲子
新築の団地を抜くる若葉風　登志子
人間こそ最強ウイルス若葉風　みどり
母の日はあんみつと決め来る息子　敏江
かたもみ券おてつだい券マザーズデー　絹映

第三例会（東京）

五明曲淵　昇徹雄報

遠き日の忘れ物めく夏帽子　喜久
葉桜や江戸のなごりの常夜灯　大場順子
退屈な蛇籠の目より蝌蚪生る　祥絵
ゆくりなく人と行き逢ふ夕焼坂　康世
火蛾遊ぶ昭和の匂ふこの辺り　徹雄
霊山へ片帆の揃ふ水芭蕉　昇

——以上特選

葉桜を縫つて校歌の途切れけり　清
行き返り触れて眠らせ含羞草　みどり
鳩遊ぶ葉桜の影きりもなし　岡野順子
葉桜や湖面まぶしき逆さ富士　康世
葉桜や廃校跡の集会所　雅夫
あかときの地震やり過ごす朝寝かな　萬蝶
葉桜や路地休校の子等の声　由美
葉桜や排泄長き牧の馬　祥絵
白地図に旅ゆく道を辿る初夏　大場順子
それぞれがまつすぐ空へ松の芯　徹雄
葉桜の映る川面に釣りの糸　理恵
ハンカチにかすかな媚を使ふひと　喜久
葉桜や雨の親しき御室御所　昇

第四例会（浦和）

境石井　延昭喜恵報

菖蒲の湯負けず嫌ひの祖父と孫　暦文
潮の香の届く老舗の穴子鮨　順子
穴子釣る静寂を破る竿の先　でん治
思ふさま想ひで溢し菖蒲の湯　昇
白焼の穴子にあはす灘の酒　延昭
釣り上げしつの字しの字の穴子かな　寛治
銭湯の気高き富士画菖蒲の湯　翔太
菖蒲湯や子の言ひ訳に巾ができ　喜恵

——以上特選

食の旅厳島より穴子めし　暦文
平らかに一と日の終り菖蒲の湯　玲子
力瘤の小さき少年菖蒲風呂　恵子
おかつぱに菖蒲かざして菖蒲風呂　順子
菖蒲風呂の菖蒲刈る鎌研ぐ朝　でん治
江戸前の海を遠見に穴子鮨　昇
つつ抜けの稚の泣き声菖蒲風呂　延昭
父と待つ一番乗りの菖蒲風呂　光子
菖蒲湯や増えたる家族賑はしき　修
アマゾンの河ゆく如し菖蒲の湯　寛治
菖蒲湯やちびつ子相撲優勝す　翔太
宿坊の菖蒲湯に聞く山雨かな　マスミ
仏参終ふまづは江戸前穴子鮨　光弥
島の子の潜り上手や穴子獲り　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江河野はるみ報

夏はじめ海を一つに逗子葉山　水尾
薔薇垣や女独りの灯を点す　義子
ロドリゴの調べ抜けくる薔薇の門　はるみ
純白に翳りの見ゆる薔薇の午後　佐江
開け放つ初夏の窓よりビバルディ　〃

——以上特選

薔薇崩れ無声映画を見るごとし　水尾
夏はじめ歩け歩けの骨密度　義子
初夏やブードルの毛をやさしく刈る　美佐尾
暗号で呼びあふ小鳥初夏の朝　はるみ
窓といふ窓開け放つ初夏の朝　理恵
初夏の翼のやうな白き雲　佐江

関西例会（大阪）

森本早苗報

万緑の中を六甲縦走す　玲子
万緑や弾む小犬の赤い靴　早苗
万緑に包まれ峡に棲み古りぬ　礼子
万緑の中に子等待つ休校舎　千津子
万緑に鎮む大塔朱を極む　敦子
万緑に傾ぐ一点野立傘　ゆら女
池面にも万緑のあり山の寺　洋子
束の間の万緑映すしづくかな　智恵子

万緑へ出立の法螺ひびかする　和子
万緑の峰へ割り込む赤鳥居　道子
万緑やいつきに増ゆる児のことば　千枝子
万緑や自由行動待ちわびて　千世子
万緑や斜面を登る猫一匹　きわゑ

若松句会（京橋）　菊池ひろこ　石田慶子　報

仰がるる殿様となれ蛙の子　鶴城
お玉杓子つつく八重歯の双生児　はるみ
蝌蚪に手足ひとに思春期変声期　萬蝶
——以上特選

各各方よ出合へ出合へと蝌蚪の陣　佐江
蛙の子友は鬼子と揶揄されて　千春
蛙子や神のいたづら蒙古斑　鶴城
楽譜通りに弾かねばならぬ蝌蚪の群　月を
蝌蚪生れて飛び乗る気配五線譜に　知子
手足生え光摑むか蛙の子　理恵
水神の手のひら広し蝌蚪生るる　萬蝶
自転車の音に乱れし蝌蚪の陣　はるみ
振り返る校歌遥かに蝌蚪の里　倭子
おたまじやくしを指で押さへて都会の子　慶子
都会では蝌蚪の変貌知らぬ子も　儀勝
かはいさは足生ゆるまで蝌蚪の群　俊晴
何某の旧式カメラ蝌蚪の池　ひろこ

夏季競詠

（令和2年）

年一回、季音・水明集全員が対象の夏季競詠です。ふるって御出句ください。したがって毎月投句の水明集はお休みです。

兼題　「郭公」
「閑古鳥」「かつこ鳥」など傍題可
「進」（詠込み）

句数　両題通じて五句

締切　七月二十五日

投句用紙　巻末に添付

各地句会

和歌山水明句会（和歌山）

群るる海猫上人窟を守る構へ　和子
柿若葉本陣跡の井戸深し　道子
六文銭の幟とりまく牡丹寺　千枝子
ブロックでたし算ひき算子供の日　千世子
万緑や御開帳ある薬師堂　満耶子
柿若葉古民家どつしり威厳あり　きわゑ
花みかん匂ひをつれて乗る列車　美恵子
散り際の千々に乱れし紅牡丹　洋子
はつなつの稚魚列となり円となり　廸代

若狭水明会（若狭）

駆け抜ける少年に風夏きざす　初花
夏めくや水車が零す水の音　和風
夏めくや浜風ふはとなまぐさし　白鷺
縁側で爪切る音に初音来る　冬至
天守より望む新樹の広がりぬ　保人
空白の予定寂しや夏きざす　鼓
夏めくやにはかに目立つ淡き色　郁子
鳥居をくぐれば神の子新樹光　寛久
手を合はす地蔵菩薩や新樹蔭　ことは
百選の水の飛沫や夏きざす　祥子
男とも見えて女や夏きざす　想子

櫟の会（浦和）

豆飯や遠き鐘の音聞き流し　裕之
初夏や夜の銀ブラ下駄軽し　克之
給食は子の大好きな豆ごはん　朋子
初夏の風湖畔めぐりの二人乗り　富子
季の香り味はひて食ふ豆の飯　彰二
歩を馴らす初夏の神馬の眩しくて　千重子
初夏の葉物惜しみ無く光り　光子
平凡の尊さ沁むる豆の飯　治子

山茶花（浦和）

阿修羅像の直ぐな鼻筋緑さす　マスミ
そら豆や朗報届くモスクワ便　清一
空豆剥くコロナ保菌者かも知れず　泰子
そら豆を食みて味はふ旬の味　嶺一
新緑を縫ふが如くに谷流る　美江子
新緑の風にゆれてる縄のれん　しず子
荷を解けば緑さす香の旬のもの　光子
蚕豆とジョッキぐいつと憂さ晴らす　綾子

皐月の会（浦和）

春暁の光一条手を合はす　静香
新参の席は切株春の暮　孝麿
夏めくや鎮守の杜の深さかな　カズ子
咲き満ちていま葉桜の古木かな　久子
我に似し兄の遺影に柏餅　暦文
葉桜の終着駅は始発駅　きいち

青葉の会（浦和）

赤銅の男が捌く初鰹　啓子
散歩道若葉の光背に降る　洋子
葉桜の光のなかを逝きし義父　和子
紀の海や耀声高く初鰹　公子
活気づく土佐の市場の初鰹　美子
耀が佳境に高嶺の花の初鰹　輝翠

蝌蚪の会（浦和）

夏めくや居間に広げる登山地図　るみ子
夏めくや魚の波動は速まりぬ　礼子
夏めくやアスパラガスはグリーン色　元美
夏めくや木陰にそつとかくれんぼ　さち子
子供の日ひたすら励むリフティング　宣子
夏めくや影に驚く沢魚　鶴城
キャンパスに夏の兆しを閑深し　月を

円卓の会（浦和）

名画座のマチネ終はりぬ街薄暑　翔太
踏切の上り下りを待つ薄暑　月を
青嵐諾ふことは華甲なり　鶴城
もみぢ手に透く血流や白重　徹

あゆみの会（浦和）

金盞花女性の長のひびく声　和
薪能篝火に浮く女面　圭子
面を付け祭り太鼓に舞台上　重子
朧の夜面影知らぬ父を恋ふ　朋子
道端にわたし主役と金盞花　山遊
陽炎や面長となる夫の顔　藻好

鶴川山百合句会（鶴川）

間隔を開けて並んで葱坊主　廉三
悪がきが出世の噂葱坊主　雄二郎
鈴掛が伯父祖母はウニ葱坊主　月を
葱坊主此処は昭和のニュータウン　喜久
「花一匁」古里の葱坊主　史代
葱坊主チビもノッポも肩組みて　広子
葱坊主子は母を越え父を越え　知子
公園へゆく子の列や葱坊主　由美子
芝桜咲く長屋門より耕耘機　千春
東雲や目覚め競ひて葱坊主　萬蝶
うつし世にただ立ち尽くす葱坊主　理恵
舶来店の褪する看板葱坊主　玲子

きざきサークル（浦和）

若葉風馬場に光りし砂の粒　啓子
翻るものに前言熱帯魚　倶子
散歩道日々変はりゆく若葉風　かつ子
ダイヤリー真つ新のまま若葉風　喜代子
襟元を少しひらきて若葉風　和枝
カーテンこしに踊るワルツや熱帯魚　タイ
ロープウェー迫り来る来る若葉山　和子

櫻蔭句会（浦和）

草の中けなげに生きる天道虫　美智枝
天道虫愛(かな)しと見ればつと飛べり　由紀子
起き抜けに見に行く母の青田かな　公子
天道虫吾の掌は滑走路　真理
呼び交はす声透きとほる青田風　茂子
借り畑の可愛い佳人天道虫　美紗子
童謡を歌ひつ歩め天道虫　多美子
大落暉海に傾るる青田波　マスミ

大宮読売俳句教室（大宮）

ひとり行く山路にひそとまゆはき草　利子
春の野は空につながり飛行機雲　紀子
一人静咲いて雨降る奥州路　正信
一人静殖えてしづかに咲きをりぬ　典子
薬草の草引く農夫春野かな　サヨ子
白妙の一人静は踊り舞ふ　卓郎
エスプレッソ飲みてカレーの春の昼　弘夫
小江戸なるボンネットバス春の昼　翔太
横たはる巨き裸婦像春の昼　治子
春昼や駘蕩として鳶一羽　君夫
小庭を値踏みするごと蜂飛来　徹雄
春昼の仏間の母の独り言　寛治
どこまでも富士の広げし春野かな　順子

芙蓉句会（浦和）

日に映えてそよぐ窓辺の鯉幟　正子
一村を塗り変へられし柿若葉　道子
楽しみは近くにありて柿若葉　税子
みずみずし柿若葉なる萌黄色　仁
のめり込む無声映画や夜半の夏　美子

野ばらの会（浦和）

お決りは白玉あづき寄席帰り　秀子
二次会は馴染の店の白玉あづき　栄子
青嵐したたかに飲む村の婚　茂子
青嵐芋坂を抜け谷中抜け　和子
断捨離に悔いも残さず青嵐　夏江
不況の声街に飛び交ひ青嵐　治江
ハンガーにしがみつくシャツ青嵐　みき子

けやきの会（東京）

籐椅子は亡き夫の座にありしまま　由美
集落にいの一番の鯉のぼり　祥絵
新緑を裳裾に引きて富士清し　康世

芽吹句会（浦和）

満身に若葉の息吹富士樹海　玲子
悔しさを撥条に男の子よ柿若葉　千重子
大輪の花と競ふや柿若葉　チアキ
若葉の園消毒液の霧重し　ひろこ
更衣昭和の小さき染み見付く　富子
方寸の庭静かなり若葉寒　徹

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

初袷父の身丈に及ばざる　延昭
雲梯に花影散らす花水木　美枝子
紺絣母が遺せし袷かな　俊晴
絹袷女妬心をつつみこむ　倶子
母の帯緩めに締めて初袷　淑子
製糸工場在りし辺りや花水木　正信
傾げ合ふ石塀小路の春日傘　昇

たかんな俳句会（川口）

青空に湧く雲白し更衣　和子
滑空のあごのしろがねびかりかな　義子
沈み行く夕日にあごのシルエット　鶴城
声までも更衣して末娘　真知子
過ぎし日を上手に畳み更衣　水尾
蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚　静香

りそな俳句会（浦和）

墨汁のしたたる太字柏餅　寛治
白壁の小窓残して蔦若葉　暦文
山門を入れば薄闇風若葉　克之
瀞凪ぎて終日（ひねもす）若葉明りかな　雅夫
奥利根にこれぞ秘湯よ谷若葉　徹
若葉風馬の嘶き一里先　建治郎
柏餅二つ目に手を休肝日　マスミ

水明大阪俳句会（守口）

名筆にそへて金言燕子花　ゆら女
コロナ禍に怯ゆる日日や花は葉に　洋子
ビルの間にふくるる一樹楠若葉　ヒサ子
新玉葱剥けば真珠の輝きに　智恵子
水面立つ運河の町の若葉風　人美
流行風邪家居籠りに夏立ちぬ　和子
座禅堂筒抜けてゆく若葉風　敦子

珊瑚の会（浦和）

麦の秋叩いてつける化粧水　水尾
花擬宝珠馬籠の坂の道祖神　昇
麦の風帽子ひらひら飛んでゆく　恵子
初鰹男をあげし土佐訛　光子
初鰹土佐の男の腕しまる　史代
産土の古ぶ景色や麦の秋　和子
花ぎぼしマリッジブルーてふ長女　広子
木道の一本ぐらつく花擬宝珠　和葉
初鰹焼く藁束を抱へ来る　かつ子
然りとても暮し上手や初鰹　喜恵
黒潮に磨かれ躍る初鰹　マスミ
生き延ぶは父の口ぐせ初鰹　節代

新樹の会（浦和）

ひとせの起承転結豆の飯　鶴城
朝焼や湯煙の先赤城山　清吉
今朝の庭薔薇の莟の先赤し　平通
独り居に今日は客あり豆御飯　京子
島唄に聞き入る未明夏の潮　韶子
青葉潮かけ声あはせ地引網　紅花
金華山沖を蕩蕩青葉潮　徹
青葉潮男の胸を焦しけり　でん治

神戸大池句会（神戸）

人気なき水辺に落花浴びてをり　玲子
菖蒲湯に浸りてコロナ寄せ付けず　礼子
メモ付きの筍門に下ぐ世情　千津子
花柄のマスク清和の庭いぢり　早苗

水明熊谷句会（熊谷）

ソーダ水竹馬の友を懐かしむ　正行
かみしむる映画の余韻ソーダ水　和子
ボレロ高まりレモンソーダの泡躍る　秀子
競走馬老いて牧場の青き踏む　燈女
走り根を越えて一途に蟻の列　治江
筍飯の匂ひの走る食卓へ　裕子
小走りで合はす歩調よ夏帽子　栄子
田植機は出水禍の田をまづ試走　徹平
桐の花会津を走る武士の魂　茂子

ミモザの会（横浜）

蕗ゆでる母の大鍋アルマイト　亜弥子
困難に克つ医師思ひ蕗を煮る　栄子
蕗むくや親指の爪黒くして　知子
蕗剥くや祖母の厨の黒光り　慶子
蕗煮詰め我が来し方を嚙みしむる　萬蝶
蕗の皮剥き筋通す母である　史代
蕗の中より滴る水と沢の音　玲子
嫌みごと剥いてしまおう秋田蕗　由美子
北の旅無邪気にさして蕗の傘　千春

雛の会（浦和）

矢車草を分けて少女のとび出しぬ　燈女
母の日を母となりたる子に祝がる　佐江
母の日の母はいつもの割烹着　喜恵
咲き揃ふ矢車草のハーモニー　チアキ
孫連れて来る母の日を待つ身なり　むら子
母の日や息子にもらふ江戸切子　輝翠
母の日や母の鼻唄楽しげに　かつ子

桜林句会（大宮）

きらめきて散る山吹のなぞへかな　光子
白魚のひかり掬ひて掌中に　知子
道標古りし水路や濃山吹　一恵
篝火や白魚漁の舟傾ぐ　美佐尾

水明松本句会（松本）

白波に白波巻いてサーファー消ゆ　恒子
宵の口蛙の声の高く低く　陽子
デパ地下も自粛さ母の日ケーキなし　マリス
美人薄命と言ひたる君や牡丹散る　玲子
若葉風満面に受け子等と逢ふ　寿子

俳句の手ほどき　（岩槻）

縫ひぐるみを抱きよせる癖若葉冷　順子
子宝の名のある秘湯山若葉　延昭
若葉光あの子の視線眩しめり　倭子
鮑持つ手より浮み来稽古海女（けいこあま）　水尾
神木に漲る力若葉風　佐江
深呼吸の後のくらくら若葉風　ます美
柿若葉のパワー総身に外気浴　慶子
山鳩のしきりに鳴くや渓若葉　義子
若葉風少女は髪をなびかせて　美佐尾
廃校にかつての生徒里若葉　翔太
脱サラの婿を住持に夏始　徹平
昭和の日頬を一撫で若葉風　忠男
窓開き撚糸工房谷若葉　幸代
駅前のシャッター通り若葉雨　美子
言ひかけて言へぬ一言若葉風　かつ子

水明発行所受付時間

曜　日：（月・水・金）

（火・木・土・日・祭日は休み）

時　間：午後１時から午後５時

第15回 角川全国俳句大賞

作品募集中!

2020年9月30日 当日消印有効　主催 角川文化振興財団

投稿方法
自由題２句１組＝2000円(税込)、
または、自由題２句１組＋題詠１句＝3000円(税込) の組み合わせ。
お一人様何組でも応募可。題詠は「雨」。

選考委員
有馬朗人　茨木和生　宇多喜代子　片山由美子　黒田杏子　高野ムツオ
西村和子　正木ゆう子　三村純也　宮坂静生

都道府県賞選考委員
源　鬼彦　阿部月山子　白濱一羊　嶋田麻紀　佐怒賀直美　秋尾　敏
高柳克弘　原　朝子　井上康明　中坪達哉　伊藤敬子　鈴鹿呂仁
石井いさお　高橋将夫　森田純一郎　白岩敏秀　江崎紀和子　西山常好
岩岡中正　岸本マチ子

賞
大賞、準賞、角川文化振興財団賞、
ことぶき賞、都道府県賞など多数。

結果発表
2021年3月(予定)
月刊誌『俳句』誌上にて発表。また応募者全員の作品を収録した作品集『俳句生活』を応募１組につき１冊送付。

応募用紙のご請求はこちら
角川文化振興財団内「角川全国俳句大賞事務局」
TEL 03-5215-7824　FAX 03-5215-7822
〒102-0071　東京都千代田区富士見 1-12-15
※Webの専用フォームからも投稿を受け付けます。
http://www.haiku575.net/

角川書店の新レーベル
「角川俳句コレクション」

角川俳句コレクション

第３弾
龍太俳句入門
飯田龍太

あれもこれも、ではなく、あれかこれか
俳句は、選択と決断の文芸。迷いを捨てて17音でズバリと言い切るために、必要な心得とは――。基礎知識から具体的な添削例まで、俳句上達の秘訣が満載！　すぐに役立つ実践的入門書。

解説　夏井いつき

好評発売中

定価(本体1800円+税)
四六判／並製／184ページ
ISBN978-4-04-884351-5

電子書籍も同時発売!
「BOOK☆WALKER」
(https://bookwalker.jp/)など
電子書店で購入できます。

KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
●〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　●TEL.0570-002-301(カスタマーサポート・ナビダイヤル)

風　声

○**俳句四季**五月号――「季語を詠む・海芋」欄

海芋咲く苑をめぐるも栄誉礼　**鬼之介**

○**現代俳句**五月号――「随想」（テーマ「空」）欄

「空は人間に」と題するエッセイ　菊池ひろこ

○**現代俳句**五月号――「現代俳句の風」欄

天窓の隙間一条初明り　岡野　順子

水温む一寸法師漕ぎ出せり　大塚　茂子

卒業子急にファッション派手となり　川島　典虎

花見鯛平家しづみし辺りより　由良ゆら女

○**現代俳句**五月号――「新入会員記念作品」欄

月天心たつた九人の同窓会　飯田　忠男

牡牛座の目ン玉ギョロリ寒昴

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）四・五・六月号「受贈誌十一・十二月号」欄

門限を守らぬむすめ月鈴子　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）五月号――「受贈俳誌美術館」欄

鉄火肌蛇の目にかくし春時雨　**鬼之介**

○**幻**（西谷剛周）五月号――「受贈誌拝見」欄

何時になき女医の横顔春の風邪　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）五月号――「受贈俳誌紹介」欄

琴爪やいつのまにやら春の雪　**鬼之介**

○**太陽**（柴田南海子主宰）五月号――「一誌一耀」欄

上枝の鶯をよぶ五色豆　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）五月号――「諸家近詠」欄

琴爪やいつのまにやら春の雪　**鬼之介**

○**玉梓**（名村早智子主宰）五・六月号――「他誌拝見」欄

虚無僧の現れさうな夕霞　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）五月号――「受贈誌の一句」欄

臘梅の香に癒さるる会議室　野田　静香

（日高徹抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和二年五月三十一日現在―

服部みどり　4口
松井由紀子　5口
阿部　幸代　1口
武田　重子　3口
山本鬼之介　50口
森川　義子　10口
矢作　水尾　20口
日髙　徹　5口
上戸千津子　10口
大場　順子　10口
田寺　玲子　10口
高橋　敏子　4口
伊藤　敦子　6口
小島　洋子　5口
保坂　翔太　5口
西幅　公子　1口
森田　祥絵　10口
藤岡真知子　5口

森本　早苗　10口
反町　修　5口
正木　萬蝶　20口
櫻井よし江　10口
笹本　啓子　3口
飯田　忠男　10口
綿貫　久子　3口
田中　章嘉　9口
下川　光子　5口
河原　叔子　1口
加藤ナヲ子　3口
飯室　夏江　5口
水落　守伊　6口
川野　妙子　5口

―合計259口―

水明発展基金募集のお願い

○一口千円　何口でも何回でも何時でも。
○振込口座番号　00130-5-45024
○領収証は発行せず、その都度「水明」誌上に掲載してお礼に代えます。

水明俳句会・水明発展基金

誤植訂正

六月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

三十二頁　上段九行目
誤　よく動き回ってれた。
正　よく動き回ってくれた。○

三十二頁　下段　最終行
誤　木戸を開け×朝帰りの男
正　木戸を開く○朝帰りの男

後記

新型コロナの拡大感染を防ぐため自粛を求められていた都道府県をまたぐ移動が解除された。初日の人出が放送されたが、暑いのにマスクをしてまでも出たいのかとつくづく人間の辛抱のなさに呆れた。私も外出禁止に慣れてくると然程つらく思えてこない。唯、一日も早く句会に出たい思いは増すばかりである。

少しずつ句会も開会されて平常に戻りつつあることも事実うれしい事でもあるが、これがいつまで続くのか祈るばかりである。

七月の夏行、九月のりんどう忌は実行出来る旨のご案内を出せた。まして十一月の90周年の記念大会は絶対に実施したいと思う。

料理屋さんの宅配が営業しているので昨日お願いした。割合に良心的で満足させて頂いた。生き残る手段としての宅配なのであろう。因みに今おいしい果物は小玉スイカである。暑い日は食してみて下さい。

（順子）

今朝何気なく我が家の車の色について私が紫色だと云うと子供達が、いや茶色だよと云った。いえ嘘でしょ紫色よと私、この色の違い一瞬とうとう来たかと頭の中に複雑な思いが巡った。それから子供達が、あの車の色は？花の色や鳥の頭の羽根の色、洋服の色はと聞いてくる有様、今の所は特別の違いはなくひとまず安心した。

しかし私の中では茶色と紫色では余りにも違いがあるので辞書を引いてみた。茶色は黒味を帯びた赤黄色。紫は赤と青との間の色とある。自分流に解釈すると両方に共通している赤色、これに光りの魔法が加わり見る人の目に錯覚を起こすのでは？と。専門家に「好い加減な事云うな」と叱責されそうだ。俳句では自分の心と向き合って作句するので何色にも染められる。例えば、狐の尾が紫だったり、マフラーの色が羅馬色だったり、かな女の独創的なユーモアに今更乍ら感慨一入である。（和子）

どうやら新型コロナウイルスも収束に向かうかと思ったが、まだまだ安心は出来ない。二波、三波などと耳に入ると恐ろしい。

水明誌も四月号から「急告」が続き、全国大会の延期をはじめ、いろいろと変更が見られた。会員の皆様には目まぐるしい思いと、分かりにくい事などあった様で心よりお詫び申し上げる。

各句会も会場が使えず、休んだり通信にしたり思う様にならなかった。俳句は座の文学と言われる様にやっぱり顔を合わせて楽しくやりたい。一日も早く安心して句会が開ける様に祈る。

子ども達も一列に並んで黙々と歩いている。元気な声もあまり聞こえない。その代わりというのも変だが、今日は色々な鳥の声が聞こえる。遠いので名前も姿も全く分からないが、可愛い声、がらがら声、忙しく、また間延びした声など耳を澄ましていると楽しい。大して見もしないテレビを消して得をした思い。

（和葉）

水明

令和二年七月号
通巻一〇七八号
令和二年七月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

令和二年度夏季競詠

「郭　公」傍題可

「　進　」詠み込み

十月号　七月二十五日締切

通じて五句

都市又は府県名	氏　名（俳　号）

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

職業

年齢

き　り　と　り　せ　ん

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本　鬼之介

麦の秋　大村　節代
水晶玉に過去未来　栢尾さく子
足もとの岩間にうつぼ五月来る　菊池ひろこ
雲切れて一村蝌蚪の水うごく　五明　昇
チェロの音の洩るる洋館花水木　境　延昭
ポプラ新樹少年大志いだくべし　椎野美代子
選りすぐる菖蒲の葉組たてまつる　丸山マスミ
夜上がりやほぐれんとする藤の房　柚木　治子
天と地をむすぶ勢の新樹かな　藤澤　喜久
安達太良や花桐高く位を保つ　小倉　倭子
白衣脱ぎ女医の春服ひるがへる　荒井　倶子
母の忌や茶箱より出す絹袷　森本　早苗
病める師に君影草のミニブーケ　野口　和子
伽羅蕗やインクの滲むレシピ帳　梅澤　佐江
純白に翳りの見ゆる薔薇の午後　矢島　清
画架立てて筆にふくます藤の色　松井由紀子
心音を医師にあづくる夏はじめ　菅原　知子
裏山の一木一草夏兆す　福田　千春
北の旅無邪気にさして蕗の傘

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

囀や親子で探す森の精　新暦文
茶はこびの人形止まる春の昼　西幅公子
百年の校舎を隠す桜かな　野田静香
下町の人情じんと春の暮　渋谷きいち
永き日や夕餉の匂風呂の音　日髙徹
雨を聞く一人静の裏鬼門　曲淵徹雄
窯元の破顔の朝や山桜　青木鶴城
逆上がりできぬ子らにも木の芽風　保坂翔太
時わかずまはる水車や濃山吹　原田秀子
新居へと向かふ荷物や鳥雲に　越田栄子
春の野に広ぐる画帳草枕　染谷正信
童女笑む牡丹桜を簪に　加藤でん治
春愁の樹々のことばを運ぶ風　神田治江
洗濯をするだけの日や柿若葉　石川理恵
春の野の息吹ありあり蝦夷地にも　横山君夫
丹精の押し花添へて花便り　太田絹映
春愁や紅ひきをへて鏡伏す　梅澤輝翠
パステルを以て描きたき春の星　鈴木和子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

水明　令和二年七月一日発行　毎月一日発行
（第九十三巻　第七号）　定価　一〇〇〇円